

行為の共同化から対象の共同化へ

——生後11～20か月における乳児Nの“人”としての成長——

Construction of Intersubjective World

——growth of an infant as a “person” in the second year——

麻 生 武

I はじめに	87
§1. 本研究の位置・目的	87
§2. “行為の共同化”と“対象の共同化”	89
II 研究方法	98
§1. 観察対象児Nのプロフィール	98
§2. 研究方法	98
§3. 資料の分析方法	99
III 観察結果とその分析	99
§1. 指差しの発達	100
§2. 言葉の発達	105
§3. 模倣・象徴遊びの発達	108
§4. 身振り・人への働きかけの発達	114
§5. 自我の発達	121
IV おわりに	129
§1. コミュニケーションの発達と対象世界の共同化	129
§2. 自我発達と対象世界の共同化	132

I はじめに

§1. 本研究の位置・目的

筆者は、子どもの“人”としてのトータルな成長を日常生活のコンテキストの中でとらえ、コミュニケーション・自我・言語の発達を解明しようと3名の乳児を誕生時から縦断的に観察している。本論はその内の1名、誕生時から2歳7か月まで観察された乳児Nに関する報告の第3報である。乳児Nの生後1か月目から11か月目までの“人”としてのグローバルな成長については、すでに拙論1981・1982において報告した。本論の分析の対象になったのはNの生後

行為の共同化から対象の共同化へ

11か月から1歳8か月までの資料である。

一般に生後9～10か月頃に、対人関係と対物関係を統合した新しい型のコミュニケーションスタイルが出現すると言われている。山田(1978)は、長男の観察から生後10か月丁度の頃 pointing・showing・mutual play・giving・バイバイなどの gesture がほぼ同時的に出現したことを報告し、これを“三項関係”の成立と位置づけている。Treverthen & Hubley(1978)は、この時期にモノを介したやりとり遊びや、母親をモデルとするモノの操作や、指差しや showing (giving) による要求や、指差しや物の名の理解が急速に見られるようになることを報告し、この時期をモノへの関心と人に対する関心とが体系的に結びつき、子どもが事象やモノについての体験を他者と共有し始める時期、すなわち“第2次間主観性”の出現し始める時期として位置づけている。

前論(麻生, 1982)では、生後6か月から生後10か月までのNのコミュニケーション行動・人とのやりとり行動を分析し、“三項関係(山田, 1978)”・“第2次間主観性の成立(Treverthen & Hubley, 1978)”と称せられている事柄には、対象に対する行為が行為と対象とに分離せぬまま他者のコメントを引き出すものとして意識される“行為の共同化”のレベルと、対象それ自体が自己の行為から分離したものとして他者に対してテーマ化される“対象の共同化”のレベルという異なる2つの水準があり、後者に先立って“行為の共同化”というプロセスが存在していることを指摘した。

山田(1978)・Treverthen & Hubley(1978)と筆者(1982)の主張のズレは単に理論的な立場の相違によるだけではなく、両者の観察した子どもの差異によるところも大きいように思われる。山田の長男は生後9か月半ば頃から、哺乳瓶を見たり何かを要求する時に“マンマ”と言い始め、10か月5日の時にはすでに“電話は?”・“ワンワンは?”と尋ねると確実に指差すことができ、11か月始め頃から自動車に対して“ブー”と言えるようになっている(山田, 1978・1982)。これに対し、本研究の対象児であるNは、1歳3か月頃によく伝達的な指差しが出現し、同時に初めてモノの名に関連する発語がみとめられるようになっている。おそらく山田の長男の場合、“行為の共同化”と“対象の共同化”とが非常に近接して生じたために、両者の関係が見えにくかったのだと推察される。前論ではNの“行為の共同化”のプロセスについて論じた。よって、すでに“行為の共同化”の水準に達したNが、どのように“対象の共同化”の水準に足を踏み入れて行くのか、Nの指差し・身振り・模倣・言葉・対人関係・自我の発達とからめてできるだけトータルに分析していくことにしたい。その作業に先立ち、前論では十分に説明しつくせなかった“行為の共同化”と“対象の共同化”という2つの概念を、Mead(1934)の理論やチンパンジーのコミュニケーション能力の問題とも関連させ、さらに明確なものにしておきたい。

§ 2. “行為の共同化”と“対象の共同化”

G. H. Mead (1934) は、次のような身振り会話という社会過程の中に、有意味シンボル（広義の言語）・自我 (Self) ・理性（反省的思考）の起源や発生を位置づけている。協同作業のような社会的なコンテクストにおいて、個体 A がある遂行的行為をしようとし、これを見ていた個体 B が A の行為の目的あるいは結果を予測しそれに対し適合的に反応したとする。そして、さらに個体 A がそのような B の反応に対して、先程の B と同じように適合的に反応したとしよう。このようなやりとりが Mead の言う身振り会話である。身振り会話において、個体 A は自分の行為に対して個体 B の反応という外的な媒介項を通じて自分自身が反応していることになる。

Mead はこのような社会過程においてこそ、個体 A の行為がその個体にとって新たな対象となり、個体 A にも個体 B にも同一の意味を持つようになる契機があると主張する。自己の行為に対して、他者の具体的な反応という外的媒介項を通らずして、自分自身がその行為＝信号の受け手として反応するような他者の態度を持ち得るようになった時、その行為は、身振り会話を越えた有意味シンボルの水準に位置づけられることになる。Mead は、子どもの言語やコミュニケーションの発達にほとんどまったく言及していない。しかしながら、以上のような Mead の理論は子どものコミュニケーション・言語の発達を考えていく上で非常に多くの有益な示唆を与えてくれるように思われる。

以下において、Mead の理論を念頭に置きつつ、“行為の共同化”と“対象の共同化”という 2 つのレベルの相違について語っていくことにしたい。泣き・笑い・怒りといった情動表出は、本来的に同じ種の他の個体に向けられたものである。人間を含む多くの動物において、そのような姿勢・情動的なコミュニケーションの操置が進化の過程の中で生まれつき身体の中に組み込まれている。生後 5 か月頃になると、乳児ははっきり人を見つめ力強く発声することによって人に訴えかけるようになる。そして時には、自分の力で直接コントロールできない対象世界について抱いた欲望をそのような装置を利用することによって他者に訴え、他者をコントロールし自分の欲望を成就しようとするようになる（麻生、1986）。だが、乳児はいつまでも無力なのではない。生後 6 か月以降、乳児は自分の力で世界を探索しコントロールしようとし始める。特に寝返りや這うなどの移動能力を獲得することによってそのような傾向は加速度的に高まっていく。モノの世界が、それまでのように大人の手をわずらわせることなく、自分自身の力で操作し得る対象世界として姿を現わし始めたのである。この時期を Treverthen & Hubley (1978) は次のように特徴づけている。子どものモノへの関心と人への関心とが多くの場合背反し、モノを操ろうとする意図と人へのコミュニケーション意図とが統合されずにいる。このことは一面の真理である。だが、対象世界に対する感覚運動的探索活動が開花し始めることは、同時にこれまでと違った新しいコミュニケーション回路への道が開かれたことも意味している。このことは強調しておく必要がある。Mead の理論のユニークな所は、社会的な

行為の共同化から対象の共同化へ

コンテキストの中で、モノの世界に対する活動ですらそれがそれに対する他者の反応というフィードバックを内化していくことによって、コミュニケーションな行為になっていくことを示唆する点である。子どもは、常に社会的なコンテキストの中に生きている。子どもは、対物的な活動の世界に足を踏み入れることによって、それまでとは違った周囲の人たちのフィードバックを一身に浴びるようになる。子どもの対物行為は、しばしば大人たちの反応を引き起こす。子どもが自分の対物行為とそれに対する他者の反応との結びつきを少しでも意識するようになれば、それは Mead の身振り会話が成立していくための最初の一步とも考えることができる。個体Aが、自分の対物的な行為が個体Bに見られており個体Bの反応を生じさせることを知り、しかもそのような個体Bの反応を誘発することを意識してある対物的な行為を行なったとすれば、そのような行為はもはや純粋な対物行為とは言えなくなる。それはコミュニケーション行為でもあると言える。たとえば、私がある人を傷つけ怒らせるためにその人の大切にしている花瓶を割ったとしよう。この時、この花瓶を割るという行為は、対物的な行為である以上にコミュニケーション行為であったと言える。それは、他者の反応を予期しそれを導き出すためになされている。子どもは、モノを操作する力を得ることによってこのようなコミュニケーションの世界に足を踏み入れるのである。花瓶を割って、叱られるのではないかと背後を振り向くようになれば、そのような世界はさらに近くなる。このように、行為が他者の反応を呼び起こすものとして意識されるようになった時、それを筆者は単独者の対物行為から区別する意味で“共同化された行為”と名づけている（麻生、1982）。私たち大人の意識的行為の多くは“共同化された行為”である。たとえそれが現実の他者のいない孤立した状況でなされようとも、私たちはその行為を私たちの内部の“内なる他者（Wallon, 1983）”あるいは“一般化された他者（Mead, 1934）”との間で分かちあっているということができる。

このような“行為の共同化”はどのようにしてなされるのだろうか。このことは前論（1982）のテーマであった。ここで生後0か月から生後10か月までの乳児Nの対人意識の成長を、これまでの報告資料（1981, 1982）からまとめ、表に示しておくことにする。

表Iを見てわかるように乳児Nの場合純粋に対物的行為と思われるような行動が、背後の人を感じつつ他者のコメント行動を引き出すものとして意識化されるようになったのは、比較的后期すなわち生後10か月頃である。しかしながら、“行為の共同化”は決してある特定の時期に急に出現するものでも、ある一定の時期で完了してしまうものでもないことは強調しておかねばならない。“行為の共同化”は徐々に生じるプロセスである。たとえば、生後6か月未満の乳児にさえその萌芽が認められることがある。筆者の観察した別の乳児は、生後5か月14日の時に母親が湯舟の中でガーゼで顔を拭いてやっているとそのガーゼを奪い口に入れ母を見つめニターと微笑したり、生後5か月26日の時には同じく湯舟の中で水道の蛇口を触りそれがキィキィ音を立てるや合間にチラチラ母の顔を見たりしている。これ以外にも人とモノとを関連させたようなエピソードが同じ時期にいくつか観察されている（麻生、1986）。乳児Nの場

行為の共同化から対象の共同化へ

表 I Nの対人意識の変遷

生後1か月目 — 人なり期 —
周囲の人々は赤ん坊の発声や表情や身体の動きを“人”のそれとして解釈しようと待ち構えている。生後16日以降、はっきりした理由もなく激しく泣き、しかも抱くと泣きやむようになったことから、“ダッコを要求して泣く・人を呼びよせる・意志がでてきた・甘え泣きする”などとみなされるようになる。1か月目の終わり頃には、人々はNの“人なり”といったものも感じるようになる。
生後2か月目 — 社交性の萌芽 —
人に対して微笑むようになったのとはほぼ同時に、モノや人の動きを追視したり、姿を見せ声をかけると泣きやむようになり、周囲の人々はNに“人”として認められているように感じる感じがだいに増えていく。
生後3か月目 — やりとりの始まり —
微笑・やわらかな発声・目があることなどが、相互の“おしゃべり”的やりとりによってかなり持続するようになる。特に、生後2か月半頃から、様々な姿勢や状況で人の目を見るようになり、むずかる際にも訴えかけるように母を見つめ声を出したりするようになる。
生後4か月目 — 人との遊び —
この時期には人との“おしゃべり”的やりとりはまったく見られなくなり、一人で人の方を見つめ声を出して“しゃべっている”ことが多くなる。母はくすぐったり、オーバーなしぐさで顔を近付けたり、呼びかけたりして相手してやるが多くなり、Nは声を立てて笑うようになる。Nは母が相手するのをやめたり側を離れようとするだけでむずかったりするようになる。
生後5か月目 — 分別の始まり —
日常慣れ親しんだ人や事物についてある種のイメージを持ち出来事がある程度予期できるようになり、意外な出来事や見知らぬ人に驚いたり注目したり用心したりするようになる。また、誉められたり悪口を言われたりすることが分かったかのような徴候や、人に見つめられることに対する感受性つまり“対峙の感覚”がみとめられたりするようになる。
生後6か月目 — 分別盛り・訴える力の出現 —
自分自身の“気分”や“分別”に左右され形通りに微笑しなくなり、周囲の人々の情緒的な表出や表現に敏感になる。特定のガラガラを与えなければむずかったり、大好きな起上がりこぼしをみつけるや手にしているものを放り出して寝返りで接近しようとしたり、食物が口に入れられないと相手を見つめ怒ったり、自分の要求や好みをはっきりとした形で表出するようになり、また不快の情動に完全に巻き込まれてしまわず、相手を見つめ“ウーウー”といった声で訴えかけるようになる。
生後7か月目 — 探索の始まり —
モノを長く調べるようにいじったりしゃぶったりし、しかも生後7か月目の後半から腹這い前進できるようになり、いちだんと活発な探索活動が数多く見られるようになる。また人を見つめまるで抱っこをしてくれと言うかのように両腕を伸ばし発声したり、人と交互に発声のやりとりをしたり、人に呼びかけるように発声したり、対人関係の成長も著しい。しかし、モノを呈示してもモノと人とを交互に見たりはせず、対物的な感覚運動的活動とコミュニケーション活動とが相互に結びつかず、平行なままにとどまっている。
生後8か月目 — 人に対する意識の芽生え —
モノの背後に常に存在している人々との関係的世界に気づき始めたかのように、時には呈示されたモノだけではなく人を見つめしかも微笑した上でモノに手を伸ばしたり、ボール転がしというゲームを理解しかけた徴候を示したりするようになる。首を回し口を背け“ウー”と発声し食物を拒否したり、母の手にしているスプーンがほしくて母の方に手を伸ばし訴え声を出したりもする。また、初めて後追いらしきことも見られたり、叱った人の方をわざと見まいとするように視線を避けたり、自分が失敗した際に照れたように人に微笑したり、自己あるいは他者を意識したような徴候も見られ始める。

行為の共同化から対象の共同化へ

<p>生後9か月目 —— 交わりの意識 ——</p>
<p>Nがつかもうとしたモノに大人が布を被せてしまうやその大人を見つめ抗議するように激しく泣いたり、何かやろうとして自分の思い通りにならないと大人の方を見つめ声を出し訴え、大人に励まされると再度自分でやろうと試みたり、他者の存在を意識した振舞いが目につき始める。大人が“ちょうだい”と手を出すと手にしているものを落としたり、大人の言葉や身振りなどを理解した徴候が見られるようになり、また、大人の介助でボール転がしをしたり、テーブルを交互に叩きあうなどのやりとり的なゲームの萌芽がいくつか見られるようになる。自分の行為を他者のそれとの関係で調節し始めたと言える。</p>
<p>生後10か月目 —— やりとり遊びの始まり・他者の反応を意識し始める ——</p>
<p>モノを介したゲームやイナイナイパー遊びなどの多種多様な人とのやりとり遊びが見られるようになる。たんにやりとり遊びの種類が豊富になるだけではなく、大人とNとの間で役割のはっきり分化した遊びが見られ、Nは初めてのゲームをすぐさま理解し、積極的に遊びに参加しそれを楽しむようになる。また、なにかをするたびに大人の方を見たり、大人の存在を意識した行動が増え、大人の反応を調べるように大人の方をうかがいつつ何度もモノを操るといった行動も見られるようになる。</p>
<p>生後11か月目 —— 行為の共同化の始まり・他者のまなざしを意識し始める ——</p>
<p>母がバイバイと手を振ると母を見つめ泣き顔になったり、ダメと禁止されると泣きそうになり母の膝に顔を埋め甘えたり、“ちょうだい”に応じて相手の手の上に手にしているものをのせたり、指差された方向をみたり、言葉や身振りの理解が進み、モノの操作の模倣も見られるようになる。このような他者の行為の理解と平行して、ラッパを吹いて貰おうと母の口にラッパを押しつけるなど、再現したい事象の一部を自分で行為することによって人に要求したりもするようになる。やりとり遊びにおいても役割の交替の萌芽のみならず、他者への積極的な働きかけが認められるようになる。また、禁止されている所に行こうとする際や新奇な面白いものを見つけた際に、大人の様子を伺ったり喜びを分かち合おうとするように、必ずといってよいほど背後にいる大人の方を振り返り見るようになる。自己の行為と他者の行為とが互いに関連し合ったものとなり、たんなるモノに対する行為ですら他者に対するある種の働きかけとして意味を持つものと意識されるようになったと言える。</p>

合も、きわめて例外的にだが生後5か月目にこの種のエピソードが観察されている（麻生，1981）。生後7・8か月になると、“行為の共同化”の兆しはもう少し明瞭なものになってくる。たとえば、乳児Nの場合生後7か月になるとモノを呈示された際に時には相手を見つめ微笑した上でつかむようになり、生後8か月にはテーブルをたたくという相互模倣的ゲームを行ったり、他児の手にしているものを引っぱり奪えず背後の大人の方に訴えに行ったりしている。これらの行為は、対他意識を伴った対物行為すなわち“共同化された行為”の1つとして数えることができるだろう。

このような“行為の共同化”のレベルに達しているのは人間だけではない。筆者の妻がかつて家の中で飼っていた犬は、散歩に連れて行って欲しくなると妻の前に来て前足でひっかけ、そしてドアの前まで行き後方を振り返り、妻がついて来ないとわかるとまた妻の前に戻りひっかけドアの所に行くといった行動を繰り返したという。また野生のチンパンジーを研究している Goodall (1971) によると、あるチンパンジーは餌場で物陰に1つバナナが残っているのを見つけ、このバナナを一人占めするため、餌場から仲間のチンパンジーを連れ出そうと率先して移動を開始し、他のチンパンジーたちが彼の後について全員餌場から抜け出してしまってから、こっそり一人餌場に戻りバナナを手に入れたという。チンパンジーが、他の個体を目的地

行為の共同化から対象の共同化へ

に誘動するために、目標の方に数歩進みそして立ち止まり、後ろを振り返り仲間がついて来るのを確認してまた移動する、といった、移動を“共同化された行為”として行なうことは Menzel & Halperin (1975) の実験によっても確認されている。また、人間の家庭で育てられた特に手話などの特別な訓練を受けなかったチンパンジーも、さまざまなコミュニケーション行為をなすことが Kellogg (1968) によって紹介されている。たとえば、Kellogg の育てたグアは、床に置かれたコーラの瓶をうまくつかむことができずいろいろ失敗したあげく、瓶を見つめそして実験者を見上げ、次に実験者の手をつかみそと瓶の下方に引っぱり、コーラ瓶を手渡してくれと要求したという。これらのコミュニケーション行為は、当然“共同化された行為”に数えあげることができる。しかしながら、これまで見てきたような犬やチンパンジーの“共同化された行為”には、それらがあまりにも目的遂行的な実践的意識に規定されているという、健常の乳児に見られぬ特徴が存在しているように思われる。すなわち、それらの行為に伴う他者意識が、叙述・共感的なものではなく、道具的 (manipulative) であるという特徴である。このような特徴は、あるコミュニケーション障害を持った子どもにも認められた (麻生・木村, 1985)。これに対して乳児Nの場合には、生後10か月頃に新奇な面白いモノを見つけた際にそれに手を触れつつ母の方を共感的にあるいは叙述的 (declarative) に振り返って見つめるといった行動が数多く観察されている。

今見たようなチンパンジーと健常の乳児との“行為の共同化”のレベルにおける微妙な差異は、次の“対象の共同化”が問題になる時目に見える大きな差異となる。まず“対象の共同化”という概念を説明することにする。私たち大人にとって、知覚される対象世界は間主観的な世界である。私は、私が今ここで知覚しているコーヒーカップなどの諸対象を、他者もまた知覚し得るということをわざわざ意識化するのが不自然に思われるほど深く確信している。私の知覚している諸対象は、私にとってだけ存在しているのではない。私は、それらを常に他者と共に、現実の他者あるいは私の内に潜む“内なる他者”と共に知覚している。このことを逆に表現すれば次のようになる。私たちにとっての対象世界は、決して実在そのものではない。私たちが他者と共に知覚し得るものこそが、私たちにとっての対象世界なのである。“他者と共に知覚し得る”と言うことは、私たちが自分たちの知覚しているものをコミュニケーション活動によって互いに伝え合うことができることを意味している。有機体の感覚運動的活動の対象は、他の個体とのコミュニケーションを通じて“共同化”され、意識の中に新たな対象として再登場すると言える。Mead (1934) は、このことを“コミュニケーションをふくむ社会過程は、ある意味で、その過程に参加している個々の生物体の経験の領域に新しい対象を生み出す (稲葉・滝沢・中野訳 p. 85)”と語っている。Mead が言わんとしていることは、次のような例を考えると理解しやすくなる。今、ある個体Aが一匹の犬を知覚し、他の個体Bに向かって“ワンワ”と言ったとしよう。個体Aは“ワンワ”という発声に私的なさまざまな思いを込めていたとする。しかしそれらはすべて個体Bに伝えられるわけではない。個体Bに何が伝わっ

行為の共同化から対象の共同化へ

たのか、個体Aは個体Bの反応を見ることによってしか知ることにはできない。個体Aは自分の発した“ワンワ”の意味を、個体Bの反応によって知ることになる。そして、このような身振り会話を数多く重ねることによって、個体Aが個体Bの反応を予期して“ワンワ”と言うようになったとしよう。すなわち、Mead 的に言えば、自分の発した“ワンワ”に他者として自分自身が反応するようになったとしよう。この時、“ワンワ”という発声は有意味シンボルになったのである。そして個体Aと個体Bとは“ワンワ”という有意味シンボルの意味を共有し、“ワンワ”という新しい概念を手に入れることになる。個体の感覚運動的活動の対象にすぎなかった「犬」という実在物は、社会関係の中で“ワンワ”という新しい意味を与えられることによって、個体Aと個体Bとの間で“共同化された”新たな対象として姿を現わすことになる。このような考え方は、“一つの言語を想像するということは、一つの生活様式を想像することにはかならない（藤本訳 p. 26）”と語り、“〈痛み〉という概念を、あなたは言語とともに学んだのである（同, p. 234）”と語った Wittgenstein (1953) の考え方にも通じているように思われる。私は夢を見るが他者は私の夢を知覚しない。私が“夢”について語るすべを知らなければ、私にとっても夢は単に一つの一過的に体験される現象にすぎない。私は“夢”について語ることを学ぶことによって、初めて自分の見た夢を他者と分かちあい、しかも自分自身の意識の対象として自分の“夢”をとらえることができるようになる。すなわち、“夢”を語るという言語ゲームが“夢”という“共同化された観念”を生み出すのである。私たち大人にとって、ほとんどすべての観念はこのように“共同化された観念”であると言える。このことは、“理性”・“心”・“神”といった用語を思い起こせばすぐ理解できるだろう。しかしここではこれ以上言及するのをやめ、“対象の共同化”と“観念の共同化”とを区別する必要性だけを指摘しておきたい。私たちの五感によって直接知覚することができない“観念”が“共同化”される（正確に言うならば、観念が先にありそれが共同化されるのではなく、“共同化”のプロセスが“観念”＝“共同化された観念”を生じさせるのである）に先立って、知覚し得る対象世界がまず“共同化”されると考えるのが自然であろう。よって、次に今まで述べてきた“行為の共同化”と“対象の共同化”という概念を定義し、その上で両者の差異をさらに明確にしたい。

まず“行為の共同化”という概念を定義したい。ある行為がその結果として他者の反応を引き出すことを意識してなされた場合、その行為を行為の主体とその行為に対する反応を想定されている他者との間で“共同化された行為”と呼び、そのような“共同化された行為”の成立していくプロセスを“行為の共同化”と呼ぶことにする。なんらかの行為がこのように“共同化”されることは、Mead (1934) の言う“身振り会話”が成立するための必要条件と考えられる。しかしながら、それは必ずしも“身振り会話”が成立するための十分条件ではない。“身振り会話”が成立するためには、1つの行為ではなく複数の行為が“共同化”され、しかもそれがある程度スムーズに連鎖する必要があるように思われる。また、“身振り会話”から

行為の共同化から対象の共同化へ

“有意味シンボル”の水準への移行過程のどこかの地点で、自分が注意する“対象”に相手の注意を向けさせるという特殊な行為、つまり指示行為が2人の間で“共同化”される必要があるように思われる。指示行為の“共同化”を抜きにして、“有意味シンボル”の成立を考えるのは困難である。“シンボル”という言葉それ自体が、シンボルによって指示されるものの“共同化”つまりシンボルを用いるという指示行為の“共同化”を前提にした言葉である。ここで、指示行為の“共同化”について説明を加えておきたい。ある発声や身振りなどが指示作用を持っていることそれ自体が、指示行為の“共同化”を意味しているわけではない。たとえば、空腹で赤ん坊が泣いているとしよう。母親にとってこの赤ん坊の泣き声は、“オッパイ・ミルク”という対象を指示するものとして解釈されるかもしれない。しかし、赤ん坊は決してこれらの対象を指示するために泣いたのではない。泣くという行為を通じて結果的に対象を指示したにすぎない。また次のような例も考えることができる。乳児が母親に公園に連れて行って欲しくて、母の手を引き公園の方へ移動しようとし、母親もその意図を理解したとしよう。この場合、母の手をつかみ公園の方へ引っぱるという行為は、確かに“共同化された行為”である。しかも、この行為には母に公園を指示するという指示作用が含まれていると考えることができる。しかしながら、このことを指示行為が“共同化”されていると表現できるわけではない。ここでは、ただ単に指示作用を伴う行為が“共同化”されているのにすぎない。すなわち、このような例では、“公園へ行こうとする”という個体の目的遂行的な行為と、“公園の方向を他者に示す”という指示行為とが分離せず未分化なままに留まっている。このような“共同化された行為”に未分化なままあるいは implicit に含まれている指示作用が、ある特殊な行為によって explicit なものとして取り出されてこそ、指示行為の“共同化”について語り得ると言えよう。言い換えれば、指示行為の“共同化”とは、ある感覚運動的活動あるいは目的遂行的活動の対象であったものが、ある特殊な活動の“共同化”を通じて、新たに“共同化された対象”＝“指示された対象”として2人の間に再登場することを意味している。先程の例の場合、“公園へ行こうとする”行為は“共同化”されていたものの、“公園”という対象が“共同化”されているのではなかったというわけである。ここで“対象の共同化”という概念を定義したい。ある対象が自分にとって存在しているだけでなく、他者に示し他者の注意がそれに向けられ得るものとして存在していると意識された場合、その対象を指示の送り手と受け手の間で“共同化された対象”と呼び、そのような“共同化された対象”の成立していくプロセスを“対象の共同化”と呼ぶことにする。“行為の共同化”にもさまざまなレベルがあったように、“対象の共同化”にもさまざまなレベルが存在している。たとえば、“行為の共同化”のレベルをほとんど脱していないような“対象の共同化”のレベルも考えることができる。ある乳児が浴室に連れていく度に天井の電灯カバーを指差し抱いている大人の顔を見たとしよう。もし、この子どもがこれ以外のコンテキストではまったくこの種の指差しをしなかったとすれば、これははたして“風呂場の天井の電灯カバー”という対象が“共同化”されてい

行為の共同化から対象の共同化へ

ることを示しているのか、それとも単に“そのような特定の対象を指差すという奇妙な行為”がある種のゲーム的な行為として“共同化”されていることを示しているのにすぎないのか、判断に苦しむを得ない。また“観念の共同化”とはほぼ同時に平行して生じるような“対象の共同化”も考えることができる。たとえば、北斗七星の柄の先の方から数えて3番目の星を私たちは直接知覚することができる。しかし、この星を“観念の共同化”をまったく抜きにして、他者に差し示し“共同化された対象”にすることは事実上不可能なことである。

人間の健常の乳幼児に比べるとある限界はあるものの、チンパンジーにも“行為の共同化”が見られることはすでに述べた。ここでは“対象の共同化”が人間以外の動物に存在するか否かという問題について簡単に触れておきたい。手話を組織的に教え込まれたチンパンジーと人間との間に“対象の共同化”が成立していることは次の例から見ても明らかである。チンパンジーのルシーは、訪問者の白いシャツにワニのマークがついているのを見つけ、このマークを数回指差しそしてクエスチョンマークを空に描き、それが何であるか訪問者に尋ね、ワニであると手話で教えられると、その手話をまねようとする。翌日、同じ訪問者がワニのマークのついた青いシャツを着て現われた際、実験者にこの人は誰かと尋ねられるや、即座に訪問者の膝の上にとび乗りワニのマークを指差しそして次に手話でワニと表現している (Linden, 1974, p. 94)。このような例から、チンパンジーには“対象の共同化”の能力があると早計に結論してはならない。“対象の共同化”とは個体の能力に帰せられるべき事柄ではない。それは、少なくとも2人の個体間のコミュニケーション活動に規定されそれに連動して成立する認識つまり“共同化された”認識の一つのレベルを示す用語である。“共同性”としてあるものをその成員の個体の能力に還元してしまうことは、全体を部分の総和にしてしまうこと、木を見て森を見ないことに等しい。チンパンジーと人間との間に“対象の共同化”が成立したことは、そのチンパンジーが人間とのコミュニケーションを通じて人間社会の“共同性”に手を取り誘われたことを意味している。確かに、そのような“誘い”^{いざな}をそれなりに同化し得たのは、そのチンパンジーの個体の能力と無関係ではないだろう。しかし、そのような個体の能力が“対象の共同化”をもたらしたのでは決してない。このことは、チンパンジー同士のコミュニケーションと、人間とチンパンジーとのコミュニケーションを直接比較してみることによって理解できる。前者のテーマは未知の領域を残しているものの、筆者の知る限り少なくとも手話などの特別な言語訓練を受けていないチンパンジーの間には、はっきりとした“対象の共同化”は見られないと言ってよいように思われる。特別な言語訓練を受けていないチンパンジーにも、ある対象に相手の注意を向けさせる“指示”を含んだ他の個体に対する意図的コミュニケーション活動がまったく観察されていないわけではない [たとえば, Menzel & Halperin, 1975。Crawford, 1937, 1941 (築嶋1967による)]。しかし、それらには以下のようないくつかの限界がある。①信号の送り手となるチンパンジーは、相手に手を伸ばし振ったり、跳び上がったリ、相手を引っ張ったり押したり、相手の先を歩き振り返って手を振ったり、時には相手に物

行為の共同化から対象の共同化へ

を投げつけたりして自分の意図を相手に伝えようとするものの、そこには手差しや指差しのような一定の型にはまった様式化された身振りが観察されない。②以上のような信号の送り手の表現行為は、その個体の目的遂行的行動と十分に切り離されておらず、“対象”の指示は implicit にそのような行為の中に埋め込まれたままになっている。③信号の受け手は、信号の送り手の意図をなかなか理解しない。よしんば理解されたとしても、それは受け手の目的遂行的行動を引きおこすという形で理解されたにすぎず、事物を共感し合うという形でなされるわけではない。

前述のチンパンジーのルシーは、チンパンジーよりはるかに相手の意図をうまく読み取りしかも相手の立場を考えて応答してくれる人間から数々の恩恵を受けていたといっただろう。ルシーの受けた恩恵はそれだけではない。チンパンジーにも同化できる手話というシンボル体を教授されたことも、ルシーと人間との間に“対象の共同化”が成立した大きな要因であったように思われる。このことは、人間の子どものように人間の家庭で育てられたものの、手話ではなく音声言語を教授されたために結局数語の語を発するに留まったチンパンジーのヴィキの例 (Hayes, 1951) を見ることによって理解できる。ヴィキは、名を言われた物を指差すという訓練を受け、それができるようになっている。しかし、これは確かに“対象の共同化”への1つの入口であるとは言え、それが汎用されず特定のステレオタイプの訓練状況に結びついたものである限り、それはまだ“行為の共同化”の域を脱していないと言えよう。ヴィキの“対象の共同化”に一番近づいたと思われる自発的な身振り表現のエピソードも、同じような限界を示している。ある日、ブランコに乗っていたヴィキが大声で悲鳴をあげて呼ぶので、ヘイズ夫人が側に行くが、夫人はヴィキがなぜ訴えているのか理由がわからずヴィキに尋ねる。するとヴィキはすぐさま1本の指をブランコの鎖の穴に出し入れしてみせる。夫人が指を調べてやると、指は赤くなり鎖にはさんだらしい凹みが残されていたというのである。ヴィキは自分がブランコの鎖に指をはさみ痛くしたという体験を夫人に伝えるために上述のように振舞ったのだろうか。もしそのように考えられるとすれば、このエピソードはヴィキが“対象の共同化”とほぼ同等あるいはそれ以上の意味を持つ“出来事の共同化”のレベルに到達し得ていたことを示していると言える。しかし、次のように考えることも可能である。もし、夫人が見ている状況でそのような出来事が生じたとしよう。この時夫人がヴィキの指の傷を調べヴィキを慰めるのはほぼ確実であるといっただろう。ヴィキにとって重要なのは夫人に自分の指の傷を慰めてもらうことである。ヴィキが上述のように振舞ったのは、夫人の慰め行動を引き起こすような自分の行動を再演することによって夫人の慰め行動を引き出そうとしたに過ぎないとも考えられる。ヴィキが純粋に自分の体験した出来事を他者に伝えるために振舞ったと考えるには、あまりにもそれは他者に慰めて貰いたいという目的遂行的な行動あるいは他者に対する道具的な行動に結びついたままであると言えよう。たしかに、ここにも出来事の“指示”あるいは自分の指の傷を他者に“指示”するといった“対象

行為の共同化から対象の共同化へ

(出来事)の共同化”の萌芽が存在していると言ってもよいかも知れない。しかし、それはまだ個体の目的遂行的な行動の中に implicit なままに留まっている。ルシーとヴィキの例を比較することによって、私たちはルシーが“対象の共同化”のレベルに到達するのに、手話という人間の共同体によって生み出されたシンボル体に大きな恩恵をこおむっていることが理解できる。

大人とかなり高度なやりとりのできる子どもであっても、同じレベルの子どもとの間では同じ水準のコミュニケーションを維持できるわけではない。これは、以上に見てきた人間とチンパンジーとのコミュニケーションとチンパンジー間のコミュニケーションの間に見られる差異と類似していると言えるだろう。Mead (1934)の関心は言語の起源、いわば子どもと子ども、チンパンジーとチンパンジーといった同等レベルの者の間のコミュニケーションの発達の問題にあったと言える。この点で、本研究のテーマは Mead と袂を分かつことになる。本研究は、言わば、ルシーと人間とのコミュニケーションの研究と同種のもののみならずことができる。人間の子どもは、すでに“対象の共同化”のみならず“観念の共同化”のレベルに達した大人たちによって、人間という種に適合したシンボル体を教授されることによって、そのような世界に導かれる。以下において、一人の乳児がどのようにして“行為の共同化”のレベルから“対象の共同化”のレベルに誘われていったか観察資料を吟味していくことにしたい。

Ⅱ 研究 方 法

§1. 観察対象児 N のプロフィール

Nは筆者の妹の第一子長男である。1981年1月26日に、妊娠38週体重 2,860g で誕生した。出産および産後の発育は順調であった。生後6か月後半に腹這いで前進できるようになり、生後7か月20日に初めて一人でつかまり立ちし、11か月30日に1~2m 伝い歩きし、1歳0か月21日に1m ほど歩けるようになっている。Nの両親の実家は、ともに近く、しかも父方母方どちらにおいても初孫であったため、Nは非常に多くの人々の注目を一身に浴び、可愛がられて育った。このためか、Nは愛嬌があり社会的である反面、マイナスの評価には傷つきやすい所がある。この傾向は、1歳頃から現在5歳に到るまで一貫して見られる。3歳3か月の時妹が誕生するまで本児は一人子であった。なお、父親は公務員であり、母親は専業主婦である。

§2. 研究方法

本児の観察は生後0か月から2歳7か月まで行なわれた。本論文で分析するのは、そのうち生後11か月から1歳8か月までの資料である。本研究の目的は、子どもの成長を生活コンテクストの中でトータルにとらえることであったため、本児の日常生活について可能な限り多くの情報を手に入れることが意図された。今回の分析で用いた資料は、次の3つの情報源によるも

行為の共同化から対象の共同化へ

のである。

i) VTR：2週に1回約30分間のVTRをノルマにした。今回の期間において撮影時間は延べ約13～14時間になる。撮影は母方の実家で行なわれ、主として母親や筆者が玩具などを媒介にして本児の遊び相手をする場面が録画された。時には4か月年少の筆者の息子Uとのインタラクションも録画された。

ii) 母親の育児日記：筆者が本児の誕生時より日記を書くよう依頼し書いて貰った。今期間で400字詰原稿用紙約180枚分になる。

iii) 筆者の観察記録：主として2週に1度のVTR中の出来事、およびVTRの前後の出来事の記述である。また2週に1度母親に尋ね耳に入った情報も書きとめられた。2～3か月に1度位の割合で、筆者の家族が実家に里帰りをした際には、2～3日連続して観察記録をとったりもした。今期間で記録の分量は、400字詰原稿用紙約610枚分になる。

§3. 資料の分析方法

子どものコミュニケーション・言語・対人関係の発達をトータルに解明するためには、日常コンテキストにおける子どもと周囲の人々との広い意味でのインタラクションをできるだけ克明に連続的に観察することが望まれる。しかしながら、本研究の資料はそのような条件をほとんど満足していない。縦断的な観察であったとは言え、それは連続的（日誌的）ではなく、離散的である。指差しや言語の発達を十分に論じるにはきわめて不十分なデータである。だが、データが少ないということは欠点である反面、子どもの全体像を把握しやすいという利点に通じているとも言える。よって、本論ではこの利点を生かすために、“言語”・“指差し”・“模倣”・“象徴遊び”・“身振り”・“対人関係”・“自我”といった広範囲にわたるテーマを扱い、それらの発達の諸関連を探っていくことにする。そのような作業を通じて、一人の子どもが“行為の共同化”から“対象の共同化”へと歩んでいくプロセスを論じることにした。

なお、以下において次のような略記号を用いることにする。N（本児）、M（母親）、F（父親）、T（筆者）、U（本児より4か月年少の筆者の息子）、G（母方の祖母）。（x；y，z）は生後x歳yか月z日を意味する。

Ⅲ 観察結果とその分析

指差しや言葉の発達を問題にする際には、子どもの周囲の大人が子どものしぐさや発声をどのように解釈し、またどのように働きかけていたかをぜひとも知っておく必要がある。子どもの個性と周囲の大人の個性との組合わせに応じて、実にさまざまなタイプのインタラクションが生じ得る。たとえば筆者の妻は、長男が生後6か月にもならない頃から長男の喃語を言葉として解釈し応答したり、さまざまな対象を指差しして話しかけたりしていた。また対象を指差し

行為の共同化から対象の共同化へ

て話しかけたりしていた。長男もこのような働きかけを好み、生後6か月には絵本をおとなしく読んで貰うようになっていた。かりにこのようなタイプのインタラクションを“言葉ゲーム”主導型と名づけるとすれば、本児とその母親とのインタラクションは“身体ゲーム”主導型と名づけることができる。母親は本児Nに対して指差して語りかけたりすることはきわめて少なかった。たとえばNが1歳0か月27日の時、“絵本のマミイを見る時以外は日頃ほとんど指差ししてやっていない。”と語っている。母親MはNの身体をくすぐったり、追いかけたり、面白いしぐさや行為をしてみせたりして相手をするのを好んだ。Nもこのような遊びを好み、静かに本を読んで貰うなどは好まなかった。MとNとの遊びは、母親の言葉かけによってリードされる会話的やりとりパターンを主とするのではなく、身体を通じた活動的なやりとりが中心であったと言える。

本論で分析する本児の生後11か月から1歳8か月までの時期は、大別して3つの時期に分けることができる。第Ⅰ期は、生後11か月あるいはそれ以前から生後1歳2か月30日までである。この時期は、言葉や指差しの萌芽は見られたものの、それらの意味や機能が慣用化されず不安定で、“対象の共同化”の準備期と言える。第Ⅱ期は、1歳3か月0日から1歳5か月29日までである。この時期、言葉や指差しの意味や機能が慣用化し、“対象の共同化”が始まったと言える。第Ⅲ期は、1歳6か月0日から1歳8か月29日までである。延滞模倣が出現、物には名があることを理解し、意味するもの (signifiant) と意味されるもの (signifié) との関係に気づき始めた時期と言える。以下の分析においては、データを今述べた3つの時期に区切って整理していくことにしたい。

§1. 指差しの発達

(a) 第Ⅰ期

前期 (生後10・11か月) 生後10か月0日、Tが膝の上にNを座らせ初めて絵本を読んでやっていた際、NはTのまねをするように人差指で絵を押さえ“ウーウー”と発声したりしている。これが初めての指差しであったかも知れない。しかしながら、MとGはこれを目撃したにもかかわらずこれを指差しとは認めず、単なる癖として片づけてしまっている。生後10か月4日には、庭を這っていた際、枯葉を距離10cm弱で指差し、正面方向に立っているMの顔を見ている。生後10か月25日には、Mが自分のいる部屋にやってくるやサークルの中のNはMの方に手を伸ばし指差したり、新聞の赤ん坊の写真を一人で指で押さえたりしている。生後11か月30日、Mが絵本を読んでやっていると人差指で絵をなぞり小さな喃語を出したりしたものの、すぐに絵本に飽きてしまっている。この時期に観察された指差しはせいぜいこの程度である。指でものをたどったり、指でスイッチをついたりする *fingering* や *poking* はしばしば観察され、指差しの理解も生後10か月頃から散発的に見られたものの、Nの周囲の者はこの時期まだNが指差しをするとは見なしていなかった。

行為の共同化から対象の共同化へ

中期（1歳0・1か月） 1歳0か月14日頃から、MはNが指差しではなく手差しするように感じ始める。Mが抱いてやっている時、行きたい方向や取って欲しい物のある方向を、手をつまみかけたようなキツネの形をして伸ばすことが時たま見られるようになる。1歳0か月28日には、棚の上の新しい絵本を取って欲しくてそちらの方向を手差しし、訴えかけるような目つきでMを見つめている。これは、Nが物の方を手差ししかつ人の方を見つめた初めてのエピソードである。しかし、その後この種のエピソードは観察されていない。Nが物の方向に手差し・指差ししたことがまったくなかったわけではないが、あったとしても、それはすべてN自身が手を伸ばせば対象に触れることができ、対象に触れてもよいか許可を求めるように大人を見つめ手差しや指差しをし、結局は対象に触れてしまう状況でなされた。この時期の興味深い手差しは、物ではなく人に対してなされた手差しである。1歳1か月前半に、Mに何かして欲しい時にMに訴えかけるように手差しすることが何度か観察されている。しかし、多くの場合Nの意図は曖昧で不明瞭であった。特定の要求を貫徹するまで持続するという性質のものではなかった。また1歳1か月8日以降、Mは対象を指差し、Nにそれを取って来させようと訓練し始めているが、この時期はほとんど不成功に終わっている。

後期（1歳2か月） この時期、抱くと手差しすることやMの方を手差しすることはあまり観察されていない。1歳2か月24日、物音を出しているMの方を振り向き、一瞬手差しし“アウヤー”と発声しすぐに手をおろしてしまったり、1歳2か月30日、抱いて貰った際に行きたい方向を手差しした程度である。この時期の特徴は、絵を人差し指で押さえ発声することが出現したことである。1歳0か月後半から、Nは絵本を読んで貰うことが大好きになり、大人が閉口するほど絵本を差し出しては読んでくれと要求するようになっている。Nはストーリーのある絵本は好きではなく、大人に絵を指差しして naming して貰うのを好んだ。この時期、絵本に対する熱中はピークを過ぎつつあったが、大人にして貰っていた行動が模倣的に内化しNの自発行動として出現し始めたとも考えられる。Nはシートに描いてあるウサギの絵を指差し“アアア”と言ったり（1;2, 1）、ベビーエイジの赤ん坊の写真を指で押さえ“トータン”と発声したり（1;2, 10）、ダンボール箱の動物の絵を指で押さえ“アッテ、アッテ”と言ったり（1;2, 12）している。絵本を読んでやっている際に、絵を指で押さえ名を尋ねるように大人の顔を見上げること（1;2, 10）がなかったわけではないが、以上のような指差しの多くは共感的であるというよりは定位的なものであった。

(b) 第二期

前期（1歳3か月） Nはまるで自分の魔法の人差し指に気づいたかのように、さまざまな折に指差しし始める。抱いてやった際、行きたい方向を指差すことも非常にはっきりしてくる。また取って欲しい物を指差し発声したり、時には人を見つめて訴えることも出現して来る。たとえば、柱の風車を指差しMを見つめ嘯語的な声で訴えたり（1;3, 15）、急に“マンマ、マンマ”と言い台所の方へ行くのでMがついて行くと冷蔵庫を指差ししたり（1;3, 26）してい

行為の共同化から対象の共同化へ

る。また、Mが抱いている時新奇なピエロの人形を指差し“ダア”と発声したり（1;3, 10）、VTR の最中に突然カメラの側にいるTの方を指差したり（1;3, 10）もしている。この時期の大きな特徴は、共感・叙事的な指差しがほとんどまったく無く、しかも意図や意味のはっきりしない指差しも多く見られたことである。たとえばテーブル上を“ヨイト”と発声し指差したかと思うと今度は床を指でつき、そしてまたテーブル上を指差したり（1;3, 21）、抱いてやると棚のいろいろな物を不安定に指差しむずかり訴え、気に入るような物に注意を向けてやるとようやくそれをはっきり指差したり（1;3, 21）、ベランダのどこかを指差し“アットゥー”と一人で発声し、指差ししつつベランダの端まで移動し、そこにあったスコップを触り始めたり（1;3, 29）、一人でどこかを意味ありげに指差しつつその方向にトコトコ歩いて行き、そして手を床におろして“アッター”と大きな声を出し背後の大人の方を見たり（1;3, 29）している。この最後のエピソードのような場合、特にそこに何かが実際にあったわけではない。Nは、このような行動様式を気に入るこの時期頻繁に行っている。

中期（1歳4か月） Nは1歳3か月後半頃から、人にもものを頼む時には少し甲高い柔らかな“アットゥットゥ”といった特別な声を出すようになっていく。この時期には、モノを取って欲しい時など対象を指差しつつこのような声を出すようになっていく（1;4, 5）。また、単にモノを取ってくれと要求するだけでなく、いろいろな要求の指差しが見られるようにもなっている。たとえば、外出したくなりMの手を引き階段の所まで連れて行き（本児は日頃2階に住んでいる）、あちこちを指差し“ト・ト・ト・ト…”と発声したり（1;4, 8）、N一人座卓の前に座り大人たちが食卓椅子に座っていると自分も仲間入りしたくなったのか食卓近くの高椅子の前にやって来て高椅子を指差したり（1;4, 12）、Mと一緒に雑誌の付録のはめ絵を見ていて、Mがこれを切り離すためハサミを取りに離れかけると、“行かないで、これを一緒に見よう”とでも訴えかけるように、はめ絵を指で押さえMを見つめ“トゥ・ウー”と発声したり（1;4, 19）している。また、対象を叙述・共感しようとするような指差しもいくつか見られるようになっていく。踏切りで、電車が近付いてくるのを見て初めて電車の方を指差し“アアア”と者ったり（1;4, 10）、広告のチラシの車やTVの電車を指差し“ブー”と発声、Mの方を同意を求めるように振り向き見つめたり（1;4, 30）している。この後者の例は、Nが対象の naming と結びつけて共感的に対象を指差した初めてのエピソードである。

後期（1歳5か月） この時期、Nにとって世界が指差すことによって他者と共有し得るものとして姿を現わし始めたと言える。Nは皿型の時計やTVやいろいろな物を指差し、“ブー”など発声し共感・同意を求めるように人の方を見るのがきわめて多くなる。また、絵本と一緒に見てやっている際に、Nが絵を指で押さえそして名を尋ねるように人の顔を見つめることも非常にはっきりしてくる（1;5, 2）。MがNの知っている対象を指差し“これ何？”と尋ねると“ハッパ（葉っぱ）”・“ブオー・ブオー（ボール）”と初めて正しく答えたりもしてい

る(1;5, 16)。次のエピソードは、Nの他者の指差しを理解する力および他者の指差しを共感的に模倣する力を示していると言える。カラスが空を飛んでいるのを見つけ声をあげさかんに空を指差しする。そのご、飛行機の飛んでいるのをMが見つけ“ぶーん、ぶーん”と指差し教えてやる。初めは分からぬようだったのがついに気づき、飛行機の方を指差し発声する(1;5, 4)。1歳5か月22日にも、NはMの模倣をして空飛ぶ飛行機を指差ししきりに発声している。このような指差しの模倣は、対象世界の共同化がかなり進んできたことを物語っていると言えるだろう。言葉と指差しの結びつきが見られ始めてきたこの時期に、指差しと母の手を引っぱるという2つの“身振り”の結合が観察されていることも興味深い。たとえば、大型スコップを取ろうとして力不足で取れず、スコップの方を指差しMの方を振り返って見つめ、次にMの所へ行きMの手をつかみスコップの所へ連れて行ったり(1;5, 2)、他児の家から帰りたくなりMの手を引き玄関まで連れて行き、外を指差ししてはMの顔を見つめたりしている(1;5, 17)。

(c) 第Ⅲ期

前期(1歳6か月) この時期の特徴は、Nがモノの名を言うこととモノを指差すことの結びつきをこれまで以上に理解し始めた徴候がうかがえるようになった点にある。Nはモノには名があることを気づき始めたかのようなのである。このことを示唆する3つの行動パターンがこの時期に出現している。1つは、大人が“ほら”・“これ何?”・“わんわん”などと言って対象を指差すと、Nも模倣するように対象を指差し“ホエ”・“コエ”・“ワンワン”などと言うことがしばしば見られるようになったことである。このことは、Nが対象の名を大人から学習していく際の1つの方略を獲得しつつあることを示しているように思われる。2つ目は、1歳6か月10日頃から、絵本だけではなく家の中のタンス・扇風機・時計などの家具・調度品を指差しそれらの名を尋ねるかのようにMの顔を見つめるようになったことである。NはMが名を言ってやると次々にこのように尋ねている。3つ目は、言葉(名)の獲得とも関連しているが、対象を指差しあたかも“これは〇〇だ”と言うかのように名を発することが目につき始めてきたことである。また、Mと一緒にいて来て欲しい方向を指差ししては、Mの顔をじっと見つめ、また指差すといった行動も観察されている(1;6, 22)。

中期(1歳7か月) 大人に対象を指差されて“これ何?”と尋ねられて名を言ったり、自発的に対象を指差し名を言ったりすることが増えてくる。1歳7か月0日には、次のような大人をはぐらかすような偽の naming 行動のようなことも観察されている。Mと一緒に雑誌マミイを見ている際、Nがウサギの絵を指差し“ニャンニャン”と言うのでMが“ウサギさんピョンピョンよ”と訂正すると、Nはハットリ君を指差し“ワンワン”と言い一人で smile し、次にゆめ子ちゃんを指差し“マンマ、マンマ”と言う。Mが“マンマ?”と反応するや“ワンワン”と言い始めている。また、この時期に初めて応答としての指差しが出現してきている。たとえば、絵を見ている際に“ブドウどれ?”・“ミカンどれ?”・“リンゴどれ?”と尋ねら

行為の共同化から対象の共同化へ

れすべて正しく指差したり（1;7, 11），Mが“ヨーグルト食べよか，Nちゃん”と言うやいつも菓子の置いてある食器棚の方を指差し柔らかな声を出したり（1;7, 11），Mが以前から教えていた効果が出てきたのか“Nちゃんだれ？”・“お母さんは？”・“お父さんは？”と尋ねられ、正しく実際の人を指差したり（1;7, 23）している。次のような指差しの新しい使用法も出現している。Mに玩具の袋を差し出したのにMがすぐ袋を開けてくれないとMを非難するようにむず声をあげMを指差したり（1;7, 0），大便をしてMの前に行きモニョモニョ言うがMがすぐにおむつを替えてやらぬと、自分の股を指差し“シーシ”や“ウーン”と言って知らせたり（1;7, 8）している。また、発語・指差し・身振り（行動）が複合的に用いられるようになっている。たとえば、“マンマ，マンマ”と言い高椅子の方を指差し、そして高椅子の所へ行きMの方を見つめふたび“マンマ”と言ったり（1;7, 11），絵本の食物の絵を指差し“マンマ”と言い、次に自分の拳を口に持って行き食べるまねをしたり（1;7, 25）している。

後期（1歳8か月） Nは自分で名が言えなくてもMが名を言ってやると正しく指差せるものがたくさんある（1;8, 9）。たとえば、Mが他児を指差し“あやちゃん”と一度教えると、その後“あやちゃんどこ？”と尋ねると正しく指差したりする（1;8, 19）。この時期に見られた、新しい型の指差しを紹介しておく。Gと本物の電話でやりとりする。Gが“お母ちゃんと一緒に行ったの？”と電話で尋ねるや、Mの方を指差し何やら発声する（1;8, 22）。ママゴトごっこの際、自分の手にしている茶碗や炊飯器から御飯をよそって欲しくなると、しゃもじをMに手渡し、そして炊飯器を指差す（1;8, 22）。壁に引き伸ばした親族の写真が貼ってある。MやFやNも写っている。Nは1か月以上前からこの写真を壁からはずして貫い写真の人物を次々と指差してはMに名を言って貰うのを好んでいた。この日、Nは壁面のこの写真の方を指差して“ヘー”と発声し、次に自分の顔を指で押さえる（1;8, 22）。写真の自己と実物の自己とを指差して同定したのだとすれば、これはかなり高度な自己意識を示していると言えよう。

Nの指差しの発達の大筋は、秦野（1983）のまとめた指差しの発達の道筋と一致している。以下に秦野のまとめた発達段階とその段階に対応するNの年齢を記しておく。第1段階「驚き・興味・再認」（1歳2・3か月），第2段階「要求」（1歳3・4か月），第3段階「叙述」（1歳4・5か月），第4段階「質問」（1歳5・6か月），第5段階「応答」（1歳7・8か月）。このような発達の道筋は、山田・中西（1983）の報告しているそれと、一つの点で大きく相違している。山田・中西らが、ごく初期の指差しについて登場すると語っている「指差しによる交流」の段階がNの場合には見られなかった。これは、山田や中西の観察した子どもの母親がいずれも指差しの発達に関心を抱いていた心理学者であり、おそらく“言語ゲーム”主導型のインタラクションを数多く行なっていたのに対し、Nと母親とのインタラクションは“身体ゲーム”主導型であったために生じた差異と考えられる。

§ 2. 言葉の発達

Nの言語発達はきわめてとらえにくかった。Nは元気によく発声する子どもだった。しかし、その発音は反復喃語的に連鎖することが多くしかも不明瞭であったため、大人が拾いあげ定型化して解釈し応答することが困難であった。小椋(1985)のように“ワー”、“アー”、“ヤー”等の感情の表出をも原言語にカウントすれば、Nは原言語が非常に多かったと言える。本研究では原言語の研究を意図していなかったため、十分な資料がない。よってここでは母親を中心とする周囲の大人たちに了解された言葉を中心に、Nの言語発達を素描するに留めることにする。

(a) 第Ⅰ期

前期(生後11か月・1歳0・1か月) Nが初めて“マンマ”と聞こえるような声を出したのは、生後9か月24日である。生後11か月3日に、台所の鍋物の所へ連れていくと“マンマンマン”と発声している。その後も、おなかのすいた時に“マンマン”と言ったり(0;11, 23), 焼きソバを見て“マンマ”と言ったり(1;0, 13), ビスケットの箱を見つけ“マンマ”と言ったり(1;1, 10)している。しかし、空腹の時でも必ずしもこのように要求せず、まったく無関係と思われる時でも同じような発声をしている。1歳1か月25日、Mは“「マンマ」は食物だけではなく眠い時も言ったり、何か一般に要求を表わしているよう”と語っている(1歳7か月11日の時においてすら、Nはボールを取って欲しくてMの手を取って連れて行き、ボールを指差し“マンマ”と要求している)。1歳0か月11日に、Gが靴下のことを“タータ”と教え、Nもその時は靴下を触りつつ“タッター、タッター”と発声するがその後消失している。また、この時期Mは“お父さん、お母さん”のような発声をしているようだがはっきりしないと語っている。Nは jargon 風の声をよく出している。1歳1か月20日、MはNの発声として次のようなものを列挙している。“マンマ”、“アーチャ”、“アチャー”、“アーイ”、“アーア”、“ウン”、“アチター”。

後期(1歳2か月) 1歳2か月24日、Mは近頃関係のない“マンマ”が減少し、おなかがすくと“マンマ”と言うことが多いと語っている。またこの時期、Mを呼ぶかのような“タータン”・“トータン”のどちらにも聞こえるような声もよく出している。指差しの所でも述べたように、絵を指差し“トットトット”など原言語的発声もするようになっていく。何か目ばしい物を見つけると、“アッタ、アッタ、アッタ”と発声しその物の所に行き必ず人を振り返って見たり(1;2, 24)、“アーイ、アーイ”と人に物を差し出したり(1;2, 24)もしている。この時期の最大のトピックは、物の名や人の名を理解したような徴候が初めて見られるようになったことである。Mが“哺乳瓶取って来て、ミルク、ミルクあげよう”と言うとキョロキョロ捜し、初めて哺乳瓶をMの所に持って来る(1;2, 22)。Mが“マミイ持って来て”・“ミルク持って来て”と指示すると、どちらも1回目は別の物を持って来たが2回目は正しい

行為の共同化から対象の共同化へ

物を持って来る(1;2, 24)。Mが“マンマどこいった?”と尋ねると、テーブル上の哺乳瓶をつかもうと手を伸ばす(1;2, 24)。“お父さんにハイして”・“お母さんにハイして”で物をその人に手渡しに行けるようになる(1;2, 23)。

(b) 第Ⅱ期

前期(1歳3か月) 初めて物の名称語が出現する。ママのネコの写真を見て“ニャンニャ”と言うようになる(1;3, 7以降)。“マンマ、マンマ”と言い台所へ行き冷蔵庫を指差したりもしている(1;3, 26)。この2語以外にも、きわめて意味的な発語“アーアッ”(物を落としたりこわしたりした時、周囲の大人がかなり以前からこのように言っていた)が適切に用いられるようになっていく。Mが鍵を下に落とすやこれを見て“アーアッ”と言ったり(1;3, 10)、Nがペンのキャップを落としたのでTが黙って指差しているとそれを見つけ“アーアッ”と言ったり(1;3, 21)している。以上のエピソードは、Nの発語が要求などの道具的機能ではなく、叙述的な機能を持ち始めてきたことを示しているように思われる。また、NはMやFの姿が見えなくなると“アチャアチャア”といった声を出したり(1;3, 16)、人を見つめさかんに jargon 的な発声をしたり(1;3, 29)、意味はよく分からねが“アイッター”・“アッター”など大声を出し人を振り返ったり(1;3, 29)している。

後期(1歳4・5か月) この時期もNの発声の大部分は、言葉というより jargon 的な発声であった。Nは人を見つめ jargon 的に発声することが非常に多い。1歳4か月0日、他児は公園で黙々と遊ぶことが多いのにNが実によく声を出しているのを他児の母が見て“N君は言葉が早いのとちがう?”とMに語っている。jargon 発声の例を示す。Tが庭に出ていると、部屋の中のNが網戸越しにTを見つめ“アットットー”と柔らかな高い声を出す。外に出たいよう。Tが網戸を開けてやると“アイタッター”と大きな声を出す(1;4, 0)。目を覚ましたN、Tがいるのを見てTを見つめ“トットォー、トットォー”と発声し、Tのバッグの中から観察メモ用のノートを引っぱり出しTに差し出しつつTを見つめまた“トットォー”と言う(1;4, 5)。Mが台所にいると、居間から台所に這って行きMを見つめつつ“アッチャチャー”と言う。Mは“このように私に呼びかけることが多い”と語っているが、同じ日別の時Tを見つめ“アッチャー”と発声したりもする(1;4, 5)。マーケットに行った時、店の中でさかんに“アーバ、アーバ、バァーバ”といった声を何度も出す(1;4, 15)。この時期、有意味語らしい“マンマ”や“ニャンニャ”はほとんど聞かれなくなっている。“マンマンマン”と言うのは眠い時や(1;5, 2)、外に出たくて網戸を開けて欲しい時(1;5, 2)で、食物や食事との結びつきがほとんどなくなっている。新しく出現した有意味語は“ブー(車)”, “パッパッ or パッパッパァ(葉っぱ)”, “ブォー”(ボール)”の3語である。“ブー”は1歳4か月21日に初出。この日、Nは自動車や積木を押し動かさかんに“ブーブーブー”と発声している。1歳4か月30日に、チラシ広告の自動車やテレビの電車を指差し“ブー”と発声、共感を求めるかのようにMを振り返ったりしている。しかし、1歳5か月3日には、テレ

行為の共同化から対象の共同化へ

ビその他何にでも指差し“ブー”と言い、Mの共感を求めたりもしている。“パッパッ”や“ブオー”の初出は1歳5か月初め頃である。これらの語にもある程度揺れが伴った。たとえば観葉植物の葉を触り“アパッパッパッ”と言うかと思うと、Tに絵本を差し出し“アッパァ”と言ったりもしている(1;5, 2)。このように揺れがあるものの、1歳5か月16日“これ何?”と尋ねられ適切に“ブオー・ブオー”・“ハッパ”と応答している。この時期の有意味語の数は、上述の3語と物を落としたり倒した時の“アーアッ”および人に物を差し出す時の“アーイ”との計5語程度と推察される。原言語的な“マンマンマン”・“アチャチャーチャ(おかあちゃん?)”・“アッタッタッタ(あったあった)”をこれに加えたとしてもせいぜい8語である。

(c) 第IV期

前期(1歳6か月) この時期の特徴は、1つはNが自分に同化できる発音は模倣しようとする傾向が少し見え始め、慣用語的な発声が徐々に増加し始めてきたことである。もう1つは、1歳6か月10日頃から、絵本以外の家具などの対象を指差し名を尋ねるようにMの顔を見ることが見られるようになったことである。Nが慣用語的な発音を同化しつつあることは、1歳6か月0日の次のような例からも理解できる。壁時計を指差し“コエ”と言ったり“ホヤ(ほら)”と言いつつ大人の方を見る。ビーチボールをノックするかのようにつんとたたきを振り廻し、“ター”とか“ホレー”と発声したり、“ヤッター”とか“エイ”と言いボールを投げたりする。紙包みの中にあるはずのボールが見つからず“ウナイ”・“ナイ”と二言つぶやき、次に“ウナウナ”と小さな声を出しキョロキョロする。Tが絵本の猫と犬の絵を指差し名を言ったり鳴きまねをしてやった後、別の絵本の猫の写真を“これ何かな?”と尋ねると“ニャー”と一声鳴きまねをし次に“ニャンニャンニャン”と言い、次に犬の写真を“これは?”と尋ねると“ワー”と両手を絵本について発声(これはライオンの絵に対してTが“ウォーウォー”と吠えるまねをしてやったためと思われる)し、すぐにTを見つめ“ニャ”と言ったりしている。1歳6か月に耳にされた言葉は、“オンモ”・“キエイ(きれい)”・“ネンネ”などの模倣的発声を除くと次のようなものがある。“ニャンニャンニャ”・“ワウワウウ(犬)”・“パッパッパッ(葉っぱ)”・“ブー(車)”・“ゴー(電車)”・“パッパ(バッタ)”・“ジージー(時計)”・“ジュウ(ジュース)”・“ブーンブーン(飛行機・空を飛ぶ鳥)”・“ハイシー(お茶を飲んで、おいしい)”・“チ or シー・シー(小便・おむつ)”・“ブオー(ボール)”などである。これ以外にも、“アケター”と言ったり蟻を指差し“アリャーアリ”と言ったりリンゴの絵を見てそれらしき声を出したことが単発的に記録されている。“マンマ・マンマ”という発音は、あいかわらず眠い時や要求一般に用いられる傾向があったものの、1度テレビで赤ん坊がバスケットを与えられている場面を見てこのように発声したりもしている(1;6, 0)。また、指示されていた物を見つけ“アッタ・アッタ”と人の所へ持って来るという“アッタ”の適切な使用も1度観察されている(1;6, 4)。1歳6か月、Nの言葉は物の名称語

行為の共同化から対象の共同化へ

約10語、それに感嘆詞や状態・感情を表わす語を加え15～20語程度と推察される。

後期（1歳7・8か月） この時期にNの言葉の発達に本質的な変化は認められていない。理解語には顕著な発達が見られたが、発語面の変化は小さい。構音能力に基本的な変化が無いためか、あいかわらず発音の不明瞭さや、発音様式の揺れがあった。たとえば、自動車のことを“ブーウ”と言ったり（1;8, 6）、積木を電車にみたてて押す際“ゴーゴー”ではなくノドを鳴らすような声で“グウーグウー”と言ったり（1;8, 22）している。語彙数にも大きな変化は無く、“オトト or トット（魚）”・“ンボ（トンボ）”・“ジ（字のこと、字が書きたくなると言う）”・“ブォウ（ブドウ）”・“イタイ・イタイ（転んで）”・“タータ（靴下）”・“マンマ（食物・食べる）”などが新たに出現したにすぎない。この時期は1歳6か月に獲得された語が定着した時期として位置づけられるかも知れない。

以上10か月間のNの言語発達の特徴をまとめておく。一番大きな特徴は、人称語がはっきりとした語としてなかなか定着しなかったことである。生後11か月の終わり頃から、Fが教えると“お母さん”・“お父さん”と聞こえるような声でMやFに呼びかけることが見られたものの、常に曖昧なままに留まっている。1歳8か月22日に、MはFのことを“アトウータン”、Mのことを“アチャーチャン”と使い分け呼びかけているように語っているものの、1歳10か月3日には、そのように呼んでいる気もするがはっきりしない、以前より分かりにくくなっていると語っている。もう1つの特徴は、Nの発声は多くしかも不明瞭であったため、大人が拾いあげ定形化し解釈するのが困難であった点である。VTRで再生してみると、私たちが聞きとれた以上にNが有意味語を発しているように解釈できるシーンが数多くあった。だが発声は人と人との間においてこそ初めて言葉になり得るのである。周囲の者の解釈・応答能力がNの言語発達を大きく規定していたのは間違いない。第Ⅲ期になりNの語彙が増加しているのも、単にNが物には名があることを知ったというN側の要因だけではなく、そのように物に関連して発声されると発声を定型化して解釈し易くなるという大人の側の要因も働いているように思われる。このことはNの語彙（大人に認定された）の中に名称語が多いことから示唆される。

その後のNの言語発達に少し触れておく。2歳0か月、2語発話が出現し、2歳1か月に“トーサン”・“カーサン”とはっきり表現できるようになり、2歳2か月“ナオノ（Nの）”・“カーサンノ”・“トーサンノ”と所有表現ができるようになっている。

§3. 模倣・象徴遊びの発達

(a) 第Ⅰ期

前期（生後11か月・1歳0・1か月） Nは生後10か月の時からすでに“カイグリカイグリは？”と声をかけるとそのしぐさをしたり、Mがラップを吹いてみせると自分も吹こうとするように口にあて、うまくいかぬとまたMの口にラップを押しつけたりにしている。この時期に

行為の共同化から対象の共同化へ

は、次のような模倣行動が観察されている。MとFとが正座し手締めをして礼を言いおじぎをしてみせると、何度目かにはNもムニャムニャ言い頭を下げ始める（0；11，21）。Mがビスケットを丸ごと口に入れてみせるや、それまでかじって食べていたNもこの食べ方をまねる（0；11，26）。相手がバイバイと手を振っている状況でMに促され初めて手を振る（0；11，30）。Mが以前してやっていたのをまねて、ラッパの口にボールを押しつけくっつけようとするが、力不足でうまくできない（1；0，5）。Mが拍手し礼を言い頭を下げると、Nも拍手し頭を下げる。Mが誉めると喜び、これがゲームになる（1；0，10）。木の車を手で持ち前後に動かすが、Mが手本を見せてもうまく手を離してころがせない（1；0，24）。Fがギュッと両目をつぶってみせるとNもまねる。Mがしても同様にまねる（1；1，7）。Tが押し車の無線マイクでNに語りかけ、Nにマイクを手渡すと、その度にNはかならずマイクを口に入れ「アー」と一声発声する（1；1，8）。Mが「こっちおいで」と手招きすると、Mの方を見つつバイバイのように手を振る（1；1，10，1；1，27）。公園で同年齢の女兒が両腕を上にあげ「アー、アー」と歩き、その母が拍手しているのを見て、すぐその女兒の近くへ行きそこからFの方へ向かって「アーアー」と声をあげつつ両腕を振り歩く（1；1，16）。ピアノを手でたたいたり、人差指で押さえて鳴らす（1；1，19）。10日近く教えてきたかいあって、「竹田直人君、はーい」と呼びかけると返事するように片手をあげる芸が初めてできるようになる（1；1，20）。Mが洗濯物を干していると、自分の側にあったおしめを持って来て洗濯棒にひっかける（1；1，25）。

この時期のNの模倣行動は非常に限られておりしかもその多くは、大人とのゲーム的やり取り状況で大人の強化を受ける形でなされている。Nが、さまざまな index (Piaget, 1945) あるいは行為の結果 (Guillaume, 1926) に導かれ、自己の行為と他者の行為との同型的対応性を意識していたとしても、それは非常に限られた範囲のことではない。Nは生後10か月頃から自己の行為と他者の行為とを相互に関連づけるようになり始めていた (麻生, 1982) が、この時期もその延長上にあるように思われる。

後期（1歳2か月） 少し複雑な物の操作の模倣（結果の模倣）が見られるようになる。たとえば、パズル box の円柱積木を自分で選び出し、box の円の穴に何度も入れ、入るたびに嬉しそうにMを見る（1；2，1）。笛を最初は吸っていたが、Mが吹いてやるとすぐ吹くことを覚える（1；2，4）。Fがベビーサークルのネジを回してはずすのを教えると、ネジを回してはずしては、はめようとする。はめるのはまだできない（1；2，5）。キリンレモンの空瓶にボールペンを入れカチャカチャ音をさせて遊ぶ。Mが瓶からペンを出してやるたびにまた入る。その後、瓶を傾けペンを出すことを覚え、一人で出したり入れたりする（1；2，10）。Tが正方形の積木を立てその上に三角の積木を乗せ家の形を作ってやる。すぐにこれを破壊し、同様の作品を作ろうとするが屋根をうまく乗せられず、ヒステリックに怒り出す（1；2，10）。Mが絵を指差し naming して絵を読んでやった後、一人で同じ絵本を開き絵をいろいろ

行為の共同化から対象の共同化へ

指差して“トット”・“オットット”などと声を出したり、黙ってページをめくったりする(1;2, 10)。Mがブラシで髪をとかしてみせ、Nに手渡して促すとブラシを肩にかつき側頭部に押しあてる。とくことはできない。これを見てMが声を立てて笑うと、Nも声をたてて笑う(1;2, 10)。Mがいつも絵本の上がり目下がり目のページでやってみせているためか、絵本のこのページを開き自分の左右の頬を人差指で押さえている(1;2, 19)。ネジを試行錯誤せず一方に回してはずせるようになる(1;2, 26)。ストローを初めて与えるが、すぐ吸うことを覚える(1;2, 27)。

以上の諸例から示唆される点が2つある。1つは、この時期Nの物の慣用的な操作能力が伸びてきている点である。このことは、この時期に次のような目的と手段とはっきり区別した、道具を用いる媒介的行動の萌芽が観察されていることとも深く結びついているように思われる。1歳2か月10日、和机の脚の側にあった直方体の酒瓶の上に立ち、机の上のライターに手を伸ばして取る。Mがライターを取りあげると、他の物をつかもうとする。この時瓶が転がったので、Mはすばやく瓶を取りあげNの背の方に置く。踏み台の瓶がなくなったので、あたりをキョロキョロ見回し、瓶を見つけてそれをふたたび机の側に持って来て、またその上に立ち机の上の小物に手を伸ばす。

2つ目は、人の模倣をすること自体がNにとってそれだけで意味を持ち始めてきていることである。絵本の指差しや、上がり目下がり目の模倣は、人とのゲームとして他者を意識してなされているとも、行為の結果に興味を持ちその結果を生じさせるためになされているとも言い難い。そこでは、人と同じ行為をすること自体が(あるいは人と同じ結果を生じさせることが)、Nにとって問題になり始めてきたように見える。Tのようにうまく積木を積めずヒステリーを起こしていることを考えるならば、この時期Nは自己と他者との行為の結果を比較することによって、自己の能力と他者の能力についてある種の比較イメージを持ち始めてきているのかも知れない。他者の行為の結果と同じ結果を生じさせることは、他者の持つ力が自分にもあることを自分に示すことに他ならない。また、Nは初めてMのまねをして音楽に合わせ身体でリズムをとるようにしたり(1;2, 26)、テレビの「お母さんと一緒」の踊りに合わせ、両手を上下に振りリズムをとるようになっている(1;2, 28)。

(b) 第Ⅱ期

前期(1歳3か月) Nの模倣的行動が多くなって来る。Mは“Nはまねしまんころ”と述べている(1;3, 10)。日常生活のコンテキストの中で、自己の行為と他者の行為の同型的対応性に気づき始めたと言えるかも知れない。Mが“チューして”と唇を突き出すと、Mの頬にチューしてくれる(1;3, 3)。手を洗う時Gが袖をまくりNの袖もまくりやる。Gが袖をおろすと、Nもうまくできぬが自分の袖をおろそうとする(1;3, 2)。手を洗ってやろうとすると自分から袖をまくりようとする(1;3, 5)。Fのまねをしてベビーチェアの上に積木を立て、嬉しそう。Mが拍手し誉めると何度もする。そのうち、うまく立てると自分から拍手し

行為の共同化から対象の共同化へ

ている(1;3, 5)。朝Fが歯を磨いていると、N側にやってきて人差指を口に入れ歯を磨くまねをする(1;3, 5)、Mが人差指で歯を磨くまねをするとNもすぐまねる。Mの口にも人差指を突っ込んだりもする(1;3, 9)。「クルクル」と声をかけてやると立位で回転する芸を覚える(1;3, 5)。Fが家の中でクラブを持たずゴルフの素振りのまね、するとNも両手をつかみ合い左右の肩から肩へ動かし振るまねをする(1;3, 6)。NがクシャミしMがタオルで鼻を拭く。その後Nふたたびクシャミする。今度はタオルを自分で手にして拭く(1;3, 9)。Tがコップで「ゴクゴク」と言い飲むまね、Nもコップで飲むまねをし「ゲー」と言う(1;3, 10)。テレビの「パジャマでおジャマ」を見ると立ちあがって文句を言い、ウロウロし始める(1;3, 12)。スプーンで食べることができないのに自分でスプーンを使いたがる(1;3, 13)。Tが缶のふたを「ウン、ウン」と力を込めて開けるまねをし、Tが「N君もやってごらん」と促すと、Nも缶の上に手をかけ「ウン」ときばり声を出す(1;3, 21)。砂浜で男の人がもう一人の男の人に波のり板のどの場所に立てばいいか指導している。しばらくして2人が去るや、N波のり板の所へ行きさきほどの人が立っていたのとほぼ同じ位置で板の上に立つ(1;3, 27)。Fのまねをして鼻クソを指でとることを覚える(1;3, 27)。Mが笠を被って庭に出る。その後N、かってに一人でこの笠を頭に被ろうとする(1;3, 29)。

この時期のNが、人のしていることを自分もしようとする意欲、すなわち模倣を通じて有能な自己になろうとする意欲を持ち始めてきたことはほぼ間違いないことのように思われる。テレビで3・4歳児が一人でパジャマに着替える「パジャマでおジャマ」がNにとって非常に不快だったのも、モデルの行動がNの能力を越えたものであったためかも知れない。この時期、Nは自分の思う通りにできなかつたりすると激しく癇癢を起こしている。象徴遊びの萌芽としては次のような遊びがある。Mがぬいぐるみの動物を操り、スプーンでカップから食物をすくうまねをしては、ぬいぐるみに食べさせるまねをする。そのうちNもスプーンでカップの中をすくうまねをしてはぬいぐるみに差し出す。Mが操り「ムニャムニャ、あーおいしい」と言ってやるが、N怒ってぬいぐるみの頭を手でたたいたりする(1;3, 21)。Nが人形に食べさせようとしたのはこれが初めてである。MやFは食事の時Nがスプーンを差し出すと、大きく口をあけて食べてやっているのに、ぬいぐるみが口をあけなかったので気分を害したらしいとMが解説する。

後期(1歳4・5か月) この時期にも数多くの模倣行動が観察されている。代表的な例を挙げる。TがVTRカメラのビューファインダーをのぞいていると、側のソファの上に立ち首をかしげてビューファインダーをのぞいてくる(1;4, 5)。Tが電気カミソリでひげを剃り、Nに手渡すと嬉しそうに自分の口のまわりに押しつける。Mが猿のぬいぐるみを「そって、そって」とNの方に差し出すと、手にしている電気カミソリを猿の口のまわりに押しつける(1;4, 5)。TV「お母さんと一緒」の体操のお兄さんがとびはねているのを見て、爪先立ちして踵を上げたり下げたりする(1;4, 6)。Gが椅子に腰かけ足を組みテーブルに肘を

行為の共同化から対象の共同化へ

ついているのを見て、これをまねようとする（1；4，11）。Fが夕食後食器を流しの方へ運ぶのを見て、Nも急に食器を台所の方へ運び始める（1；4，16）。TVの体操のお兄さんの「象さんのあくび」を両手を上にあげてまねる（1；4，28）。Mが調味料をふりかけているのをじっと見つめ、Mがそれを置くやすぐ手にして同じように振る（1；4，29）。砂場でMがコップで砂の型取りをしてやる。Nもまねしてコップに砂を入れ逆さにするがうまくできない（1；5，12）。Fが投手スタイルで石を投げていると、Nも両手を後頭部に回しまねようとする（1；5，14）。FとMとが両腕を組んでいると、Nもまねをする。両腕を交差させることはできない（1；5，14）。Mがコットンに化粧水をつけ、頬をたたいたり、両手で頬をたたいたりしていると、Nも瓶を手にしてそれを傾け掌に液をつけ自分の両頬をピチャピチャたく（1；5，23）。Fがオーデコロンを手につけ胸元や襟元を手でたたいていると、空のオーデコロンの瓶を与えられたNも、瓶を傾け手に液をつけるまねをして自分の喉下あたりを手でたたく（1；5，29）。絵本の中で男の子が両手をあげバンザイをしているのを見て、教えたわけでもないのに両手を上にあげる（1；5，29）。

私たち大人は他者の行為を実際に模倣せずとも、イメージによって自分の身体にその行為を引き写し、それを理解することができる。しかし、子どもは初めからそのようにイメージできるわけではない。子どもにとって、単に他者の行為を見ることによってその行為の主體的側面を理解するのは困難なことである。子どもは実際に模倣してみることによって初めて、他者の行為の何たるかを知るのである。この時期、Nにとって「模倣する」ことが他者の行為を理解するための方略になってきたと言えるかも知れない。足を組む、腕を組むといった純粋なしぐさの自発的な模倣も観察されるようになってきている。また絵本の人物のしぐさの模倣も観察されている。Piaget (1945) も、娘J (1；6，23) が写真の人物が口をあけているのを模倣した例を、第6段階の模倣のエピソードとして紹介し、「あたかも、見たのを理解するには、造形的に身振りをしてみる必要があったかのようだ(私訳)」と述べている。

(c) 第Ⅲ期

前期（1歳6か月）絵本の子どもの手を洗っている写真のページを見て、教えたわけではないのに両手をこすり合わせる（1；6，3）。Gが生後9か月のS君の正面に立ち両手をつかみ「よいしょ、よいしょ」と歩く練習をさせている。そこで、TがGのまねをしてNの両手をつかみ歩かせる。NはまるでS君のまねをするように膝を曲げずゆっくりとしたぎごちない歩き方をする（1；6，7）。Tがソファの下に両手を入れ椅子を少し斜めに移動させる。Tがやめるや、すぐソファの前にしゃがみ座部の下に両手を入れ、持ち上げ動かそうとして声を出し、そして背後のTの方を振り返り見つめる（1；6，8）。そして Piaget (1945) が、象徴能力の先駆形態として位置づけている延滞模倣が出現する。1歳6か月9日のことである。この日、庭で花火をする。蚊がいたため大人が手でたたき蚊を取ったりもする。この時は模倣せず、その後1時間ほどして家の中で、N両手をパチンと鳴らしてたたき自分のてのひらを見つ

行為の共同化から対象の共同化へ

め、そして大人の方を見る。このようなことを計3回ほどする。1歳6か月15日、Mは“Nは大人のしていることをその場ではまねず、だいぶたってからかってに思い出しまねをすることがある”と語っている。3日前、Mが実家の玄関のドアをノックしたことを覚えていて、拳でコンコンとドアをノックする(1;6, 18)。延滞模倣がこのように出現し始めたこの時期に、Nの象徴遊びにも転期が訪れている。この時期のNにはまだ自分自身で対象を二重化してみたて真のみたて遊びは出現していない。たとえば、1歳6か月7日、小石を20cmほど押し動かして“ブー”と小さな声を出したりしているものの、すぐやめてしまっている。小石を自動車に見たてたとは考えにくいように思われる。この時期に開花したのは、大人のみたて遊びを模倣し同化する能力である。1歳6か月15日、Nは大人のモデリングによって次のようなままごと遊びができるようになっていく。積木に描いてある食物の絵や、ままごとセットの台紙の野菜の絵を空つまみして口に持って行きパッパッと音をたてて食べるまね。ままごとのかんをグラスの上で傾けてそそぐふりをして、次にグラスを手にしてあごをのけぞらせ飲むまね。左手に持ったままごとと容器から右手のスプーンですくうまねをし、それを床のグラスの中に移しかえるまね。容器からスプーンですくうまねをして、大人の手に行き出し出す。はしを自分の口に持って行きチュッチュッと舌を鳴らして食べるまね。Mがキティちゃんの絵の積木を差し出し“キティちゃんにもあげて”と言うと、積木の絵のキティちゃんにはしを差し出す、などである。この日以降Nは、食べるまねをしたり人に食べさせるまねをする遊びが大好きになっている。たとえば、1歳6か月19日、Nはゼリーの空の容器を手にしてその中に手をつこんでは空つまみの手を口に持って行き食べるまねをしたり、大人に食べるまねをするよう空つまみの手を差し出ししたりしている。

後期(1歳7・8か月) この時期の延滞模倣はさらにはっきりしたものになってくる。1週間前、公園で3・4歳の子どもが母親にボールを放って貰いバットを振っている。この時、Mも頼まれ子どもたちに少しボールを放ってやったりする。Nは参加したくて、うろうろしてじゃまをしたりしていた。この日、公園のグラウンドの中で棒を振り始める。そこで、Mがボールを投げるまねをしてやると、Mがボールを放るまねをしてから棒を振り野球のまねをする(1;7, 21)。道路脇にある小さな地藏の所を通ると、急に正座して両手を合わせ頭をピョコンと下げる。半月ほど前、Mがこの地藏の前でしゃがみ手を合わせるとNもまねしたことがありそれを覚えていたらしい(1;7, 27)。夜寝かしつける時“ゴー、ガー”と繰り返しいびきをかきまねをする。教えたわけではない。夜中にFやMがいびきをかいているのを聞き覚えていたらしい(1;8, 23)。公園のコンクリートの塀のようなものに丸い穴があけてある。2か月ほど前3歳位の女の子たちが“ベッドよ”などと言ってこの中で寝たりしていた。これを急に思い出したように、同じようなスタイルで穴の中に寝る(1;8, 25)。この時期も、人形や人物を食べさせたり自分で食べるまねをするままごと遊びが大流行している。Tが貝がらで床をすくい飲むまねをすると、Nは貝がらで空中をすくい飲むまねをしたり(1;7, 11)、Tが三

行為の共同化から対象の共同化へ

角の積木をジュースのコップにみたくて飲むまねをするとNも同様に積木から飲むまねをしたり(1;7, 25)する。大人が促すとぬいぐるみの犬を食物の絵の描いてある積木に押しつけ“マンマン”と言ったり、ぬいぐるみの猿に同様の積木を押しつけ“アーシイ”と言ったり、絵本のピクニックの弁当の絵を指差し“マンマ”と言い手を拳にして口に持って行き食べるまねをしたりする(1;7, 25)。公園にあった石の犬の置物の口に木の枝を突っ込み食べさせるまねをする(1;8, 3)。絵本のパンの写真を自分から空つまみし、大人の口の方に差し出す(1;8, 6)。ままごとの炊飯器からしゃもじで茶碗によそうまねをし、はしで茶碗から食べるまねをする(1;8, 17)。これらの象徴遊びは、対象の二重化を伴う真の見たて遊び、すなわち筆者の言う“狭義の象徴能力(麻生・木村, 1985)”による遊びとは、まだみなし難いように思われる。しかし、大人が手を取ってやりさえすれば、真の見たての世界に近い世界ではばたけるようになったことも事実である。1歳7か月25日、この日初めてTが積木で2台の電話のような物を作り、電話ごっこ遊びに誘う。Tが棒積木の受話器で話しかけると、Nも積木の受話器を耳にあてる。Tが“それじゃあバイバイ、ガチャン”と受話器を置くと、Nはバイバイするように手を振る。また自分の受話器をうまく積木の受話器台の上のせたりもする。Tが三角の積木の斜面をダイヤルにみたくて指で回すまねをするとNも同様にまねる。また、受話器を口にあて“トットトット…”としゃべるまねもする。これは単なる大人の模倣であり、真の見たて行動とは言えないかも知れない。しかし、少なくともNが“電話”というもののイメージを人と共有できる形で持てるようになりつつあるとは言えるだろう。

イメージの世界が開花し始めてきていることは次のようなエピソードからも分かる。ビニールプールで水遊びをさせている時、ビニール袋をタオルのようにして自分の首筋などをゴシゴシ洗うまねをする(1;7, 3)。積木を3個連結するように並べ手で押しバイバイのように手を振る(1;8, 18)(1歳6か月前頃から、Nは“お父さんいってらっしゃいと子どもが電車に手を振っている絵本”の影響で電車が通るのを見るたびに手を振るようになっていた)。積木を3個並べて押し“ゴーゴー”と言う(1;8, 19)。またぬいぐるみなどの人形もかなり擬人的なものとして理解されるようになってきたと言える。夜寝る時にぬいぐるみの熊を自分の横に寝かせ一緒に寝ようとしたり(1;7, 28)、ミニチュアの傘を上手にさすのでTが“ワンワンも雨に濡れちゃうよ、ワンワンにも傘さしてあげて”などと言うと、ぬいぐるみの犬の横に立ち犬の上に傘をさし、次にしゃがんで犬の頭のすぐ上に傘をさしたりしている(1;8, 22)。

§4. 身振り・人への働きかけの発達

(a) 第I期

前期(生後11か月) この時期には様式化した身振りはほとんどまったく観察されていない。せいぜい生後11か月30日、Mに促されてバイバイに応え初めて手を振った程度である。大人の

行為の共同化から対象の共同化へ

指示はある程度理解することができた。たとえば、Tが座卓を立て、イナイナイパーをするように言葉で指示すると、机の陰に這って行き顔を一旦隠してまた出したりしている。大人のアンコールに応えたりもする（0；11， 3）。ストーブの柵などにつかまり立ちするのを一旦見過ごし、途中から禁止し始めても、叱るたびに泣くもののまた禁止されたことを繰り返す（0；11， 16）のに、初めから一貫して禁止すればその日は2度と禁を犯さなかったり（0；11， 30）している。また、禁止された物に触る時、背後の人をうかがうように振り返ることも数多く観察されている。リングや哺乳瓶を与えられた時、自分で食べたり飲んだりし、次にMの口に差し出したりする（0；11， 14）ことはあったものの、この時期まだ自発的な giving は観察されていない。生後11か月30日以降、ようやくMの“ちょうだい”と手を出すのに応じて物をMに差し出し手渡せるようになったにすぎない。

中期（1歳0・1か月） Nはパズル box の積木で giving のゲームを覚えたためか、まずこの積木を自発的に giving するようになる（1；0， 13）。そして次に、哺乳瓶のキャップが固く自分で取れない時や瓶が空になった時に、不満げな声を出し瓶をMに差し出し要求するようになっている（1；0， 21）。

1歳0か月27日、Mは手差しして物を取って欲しそうにすることもあるものの、上述のような giving による要求の方がはるかに伝達的と語っている。このあたりから、Nはじつにさまざまな状況で giving するようになっている。絵本を大人に差し出し読んでくれと要求したり（1；0， 25）、Mが化粧瓶のふたをあけて見せてはふたをしめNに手渡すと、何度も何度もふたたびMに差し出し、このゲームを反復することを要求したり（1；0， 27）、尻を床に下ろした際ゴムのネコを踏みつけ音がするやすぐ立ち後ろを振り向いてゴムネコを見つけそれを拾ってMの方に差し出したり（1；1， 7）、Nが押し車を触っていると生後9か月のUも這ってきて車を触り始めるので、NはしきりにUの手を払いのけ、それでも効果がないとブロックをUに差し出したりしている（1；1， 8）。また、ネジで歩く人形が止まるとMの方を見、すぐさま人形の方を見て“ウェー”と声を出し、人形をつかみMに差し出したりもしている（1；1， 10）。上述のゴムネコの例は、ゴムネコを叙述物に指差すのとはほぼ等価な意味を持っているように思われる。だとすれば、これは対象の共同化の一例と見なすことも可能かも知れない。生後9か月のUに対しては次のような行動も観察されている。Uが常にNの方に這ってきてNの手にしている玩具に手を伸ばすので、これを嫌がり自分とUとの間に押し車を割り込ませてUをブロックする（1；1， 10）。また、次のような行動も見られる。夕食の準備中、Nはいつものようにベビーサークルの中に入れられている。サークルの中でMに最も近い場所へ来て、Mの方に玩具を差し出しては、さかんにサークルの外へ玩具を落とす（1；2， 25）。サークルから出して貰えぬのは承知の上でMの気をひこうとしていたらしい。この時期、Nは自分の力でサークルを抜け出せるのにMが忙しそうにしている限りは中で我慢している。1歳1か月9日あたりから、Mが“待っててね”と言うと少しの間は自家用車の中で一人で待てるようになっ

行為の共同化から対象の共同化へ

ている。自分の行為に対して他者のコメント（賞賛あるいは共感）を求めるような行動も観察されている。四苦八苦してようやくソファの上によじ登り、“ほくできたよ”というように右方向のGを見つめ smile したり（1;1;10）、逆さにしたサイドテーブルの脚につかまって立ち、左右の足を交互にあげ2往復足を踏み鳴らし、“ほら面白いことできたでしょ”というようにMの方を見つめたりしている（1;1, 25）。

後期（1歳2か月） giving の時 jargon 的な声を伴うことが非常にはっきりしてくる。たとえば、瓶に入っているベビーボーロを出せず“アッ”・“ダッテ”と声を出しMに差し出したり、Mがわざといじ悪く背を向けると“エー”と怒り、ふたたびNの方を向いたMに“ダッ”・“テッ”・“ドッ”・“チョ”など声を出して瓶を差し出したりしている（1;2, 10）。1歳2か月24日には“アーイ”と言いつつ人に物を差し出したりもするようになっている。また、giving に人に対する挨拶的なニュアンスも感じられるようになる。たとえば、Mの実家で2週間ぶりにTに出会ったばかりの時、Tの呼びかけに照れたように smile し視線を少し避け、近くにあった新聞紙をつかみ“アー”と言いつつTに差し出したり（1;2, 10）、2週間ぶりのTが昼寝していたNを起こすと、Nはすぐさま隣のサンルームに行き屑入れの中から紙切れをつかみ“アーウヤー”と発声しTに差し出したりしている（1;2, 24）。この時期の終わり頃、Nは“ミルク持って来て”や“お父さんにハイして”などの言語指示に従うことができるようになっている（§2参照）。

(b) 第Ⅱ期

前期（1歳3か月） 伝達の指差しが出現し、初めて名称語が出現し、模倣が急に多く見られるようになったこの時期は、“身振り・人への働きかけ”についても新たな展開が観察された時期でもある。これらを項目別に列挙する。①言語・コンテキストの理解力：Mが“マンマ、ごはんよ”と言うと食卓の自分の席であるローチェアに腰かける（1;3, 10）。食事だと分かると自分でローチェアを持って来て食卓の前に座る（1;3, 18）。夕方Mが“お父さんまだかなあ”と言うと、いつも父が帰宅する入口の方へ行く（1;3, 23）。実家でMが“帰ろう”と言いつつ腰をあげGがNを抱き上げるや自分からバイバイのしぐさを始める（1;3, 29）。②他者の行為に協力：Mにパジャマの上着を着せて貰う時、自分から手にしている哺乳瓶を他方の手に持ち替え、腕通しに協力する（1;3, 7）。③新たに様式化した人への働きかけ：朝まだ寝床にいるMの髪の毛を引っ張りMを起こそうとする（1;3, 2）。公園で同年齢の子ども（1;1）に初めて抱きつく（1;3, 19）。1歳3か月28日から人の手を引くようになる。公園でMが他児の側にいるとMの手を引き自分の方に来させようとしたり、すべり台がしたくなるとMをそちらへ引っ張る（1;3, 28）。1歳3か月29日前あたりから、Nは人にものを頼むような時には、人を見つめつつ高い柔らかな小さな jargon 的な声を出すようになる。④新しいタイプの giving：Tに親愛の情を示すかのように、何かと物を差し出す。テーブル上の小物を指差しMに取ってくれと要求し、それを取って貰うやTに差し出しに来る（1;3, 21）。

行為の共同化から対象の共同化へ

また次のような Mead (1934) の“身振り会話”のレベルに達したと言えるような、他者のことを配慮した giving も観察されている。1歳0か月のUとNとが新品の録音テープを奪い合う。2つあったテープを2つ共Uが奪い取ってしまう。1時間10分の後、積木を触っているNは、正面にいるUに積木を差し出しては“トット・アトゥ・トゥ…”といった高い細い声を出す。Uが受け取ると、Nすぐさま同様に別の積木をUに差し出す。2回・3回と繰り返すとUはなかなかNの差し出す積木を受け取らなくなる。Uが受け取らないと見るや、Nは急に“この子の好きなのは積木じゃなくてテープだ”と思いついたかのように、右横の座卓の上にあった先程のテープをわざわざ立って取り、そしてUに差し出す。UはNの思惑通りすぐこれを受け取る(1;3, 29)。⑤自発的な挨拶としてのバイバイ：庭の方を指差し“トゥ・トゥ”といったお願い声を出すので、Nを抱いていたGがNをおろし戸を開けてやる。すぐ庭の方へ歩き、そしてGの方を見つめ手を振り始める(1;3, 29)。⑥新しい身振り：1歳3か月21日頃からMが“お風呂チャプチャプしよう”と言うとなぜか両掌をニギニギ開閉するようになっている。

また次のような目づかいも観察されている。これはかならずしもこの時期に出現したとは断定し難いが、“対象(事象)の共同化”のレベルに達した目づかいと考えられる。テーブルをはさみNの正面1mほどにいるTがゼンマイで走る車のねじを巻き、Nの左方向に車を走らせる。音をたてて車が走る。Nはすぐさま首を左に回し車の方を見る。車が家具にぶつかり止まってしまうや、すぐさまTを見つめる(1;3, 29)。

後期(1歳4・5か月) この時期のNとのノンバーバルコミュニケーションを、まず1つ具体例で示したい。次のエピソードの中に“対象の共同化”が explicit に示されているとは言い難いかも知れないが、“対象の共同化”がある程度成立していなければ次のようなやりとりは不可能であるように思われる。Tはソファに腰かけ両足を座卓の上に投げ出している。Nは座卓の上、Tの両足の間に座っている。Nが自分の服にくっついていて洗濯バサミをうまく自分ではずしTに差し出すので、Tはそれを受け取り自分のズボンの膝あたりにくっつけて見せる。すると、これを見てNは嬉しそうに顔を上げTを見つめ、そして洗濯バサミを見つめ手を伸ばし、またうまくはずす。そしてTを見る。次に自分でTのズボンに洗濯バサミをくっつけようとするがうまくいかない。顔をあげTを見つめ、洗濯バサミを差し出す。そして、また上と同様のやりとりが繰り返される(1;4, 19)。以上のエピソードにおけるNの目づかいが、この時のさまざまなコンテキストにおけるNの目づかいのレベルを象徴的に表わしているように思われる。

またこの時期にいくつかの新しい行動パターンが出現している。①新しい身振り：いつ出現したのかはっきりしないが拒否の首振りが初めて確認されている。この時期、Nの首振りは決して多くはないが、たとえば、Mが芸をさせようと誘いNに手を伸ばすと“フーン”とむずかり声をあげ、首を大きく左右に振ったり(1;4, 5)、道を歩いている時、放置してあった三輪

行為の共同化から対象の共同化へ

車に乗りたくて道に座り込むのでGが“だめ”と禁止すると首を振りイヤイヤのしぐさをしたりしている(1;5, 2)。1歳4か月15日頃、おやつを欲しがった時Mが手を重ねる“ちょうだい”のしぐさを教えるとすぐに学習し、その後時たまおやつに限らず何か欲しい物がある時このしぐさをするようになる。高椅子でおやつや食事をし、高椅子からおろして欲しくなると、自分から手を合わせ“ごちそうさま”のしぐさをするようになる(1;4, 24)。両手を上に向けニギニギ開閉させるしぐさも1歳3か月の時と同様にこの時期も観察されている。1歳5か月18日、Mは次のように記している。最近は“チャプチャプしようか”あるいは“お風呂入ろう”と声をかけるとこのしぐさをしMの手を引き風呂場へ連れて行く。② showing の出現：前述の1歳1か月7日のゴムネコのエピソードは、showing の例として考えることも可能かもしれない。だが、周囲の大人たちはNが物を差し出すと、いつも手を出しそれを受け取ってしまっていたので、giving と showing の区別がつけにくかったと言える。1歳5か月2日、初めて giving ではない showing が観察されている。この日、ソファの下からボーリング用の木の玉を見つけたN、これを手にしてVTRカメラの側のTの前にやってきて玉を差し出しTを見つめ jargon 的に語りかける。そこで、Tが手を伸ばすが、玉を手渡さずTの前から去ってしまう。1歳5か月10日には、来訪した友達の母親に、自分のいろいろな玩具を見せに行っては嬉しそうに語りかけている(これはMの記述であり、現象的には giving になっていた可能性もある)。③人の手を引くことが非常に多くなる：例を示す。空腹になるとMの手を引き冷蔵庫の前に連れて行き扉に触ったり(1;4, 19)、父方の実家で、いつも触らせて貰っている本物の電話で遊びたくなり、祖母の所へ行き手を引っ張ったり(1;4, 20)、一人でテレビを見るのを嫌がり(怪獣が恐いたためもあるよう)、台所にいるMの所へ来てMをテレビの前へ引っ張り一緒にテレビを見ようとしたり(1;5, 27)している。④移動しつつ相手を見つめ一緒についてこいと誘う：例を示す。公園のベンチにMが座り、正面砂場で遊んでいたN、Mの右3mほどの花壇の向こう側に行き、Mに“こっちに来てくれ”と言うようにMを見つめさかんに jargon で話しかける。MがNの方へ移動し出すと実に嬉しそうに走り出す(1;4, 5)。昼寝から目覚めたN、側に寝ていたTと一緒にいこうと言うように居間の方へ移動しつつ立ち止まるとはTの方を振り返りTを見つめさかんにしゃべりかけてくる(1;5, 2)。ミルクが欲しくなり、床に落ちていた空の哺乳瓶を拾い、Mの手をこじあげMにそれをつかませ、自分の行きたい台所の方へ首をねじり横目でMの方を見つ、Mの手は引かずにゆっくりと台所の方へ移動する(1;5, 29)。

以上、1歳3か月の時と比較すると、行為や世界がいわゆる“共同化”され、Nが身振り発声によってより自由に人に思いを伝えられるようになっていくことが分かる。

(c) 第三期

前期(1歳6か月) この時期は、モノに名があることに気づいたかのように名称語の数が

増え、モノを指差し名を言うことが多くなり、延滞模倣が出現し始めた時期である。この時期、特に新しい“身振り・人への働きかけ”は出現していない。少し目立ったエピソードを紹介するに留める。シーソーが止まると尻を上げもっと動かしてくれと催促する（1;6, 12）。外で花火を見て感激し、少し離れた所で見ていた祖父に“ワーワー”と言い報告しに行く（1;6, 20）。ふとんたたきを嬉しそうにラケットのように振り回しているのを、Gが“おじさんに見せといで”と者うと、別室のTの前にやってきて振り回す（1;6, 21）。また次のエピソードのように、giving やバイバイが自発的なゲーム行動の中で自由に使いこなされるようになっている。1歳6か月28日、大きな紙の手さげ袋の中に絵本を入れては、袋を引きずりMの前にやって来て絵本を取り出し“ハイ”とMに差し出し、すぐその本を袋の中に戻させ、バイバイのしぐさで手を振りMから少し離れ、またMの前にやって来て“ハイ”と本を差し出す。このようなことを何回も繰り返す。

後期（1歳7・8か月） この時期に特筆すべきことは、意味するもの（signifiant）と意味されるもの（signifié）との関係が有縁（motivé）とは言えない高度に様式化した身振りが新たにいくつか出現したことである。これまでに見られた“giving”・“手を引く”・“髪の毛を引っ張る”・“相手を見つめつつ移動する”・“showing”などの身振りは、自己の要求・意図のかなえられた目標の状態に他者を物理的に近づけようとする具体的行動の一部が様式化したものであったとすることができる。“指差し”も、それが他者の注意を指示された対象に具体的に向けさせるという効力を持っている限りにおいて、ある程度有縁なものを見なすことができる。§1で述べたように、Nは1歳7か月0日、人を非難するように相手を指差している。このような指差しは、他者の注意を他者自身に向けさせるということがある抽象性を持っている程度において、一般の指差しよりは有縁性の程度が少ないと考えられる。この時期に見られた意味するものと意味されるものとの有縁性の少ない高度に様式化した身振りには次の4つがある。①首振りによる拒否：拒否の身振りそれ自体は1歳4か月頃から出現しているが、この時期、人の働きかけに応答として首振り拒否することがこれまでに比べ目立って多くなる（1;7, 0）。たとえば、Mが“ちょうだい”と手を出すと、首を振り拒否するなどの行動が多くなる。②人に側に来てくれと自分の近くの床を手でたたく：このしぐさは、そもそもMが最初“N君、はやくここにねんねして”と言い横になりふとんの上を手でたたくしぐさをしてきたことから派生したものである。1歳7か月3日頃から、NはMのこの身振りを取り入れ、眠くなると畳の上を手でトントンたたきMを見つめ“ここに添寝してくれ”と要求するようになる。1歳7か月11日、Mはこのしぐさが時にはゲーム的に用いられることもあると語っている。たとえば、Nが床をたたくのでMがそこへ行くとNが移動しまた床をたたきMを呼ぶといった遊びになるのである。1歳8か月22日頃には、眠い時だけでなく側に来て一緒に遊んで欲しい時などにも、相手を見つめ“ここに座って”と言うように床をたたいたりしている。③両掌を上に向けニギニギ開閉させ風呂場へ誘う：1歳3か月から、NはMが“お風呂入ろう”と

行為の共同化から対象の共同化へ

か“チャプチャプしよう”と誘うとこのしぐさをしていた。1歳7か月11日頃には、NはMがそのように声をかけた時でなくても、自分が風呂場で水遊びがしたくなるとこのしぐさをしてMに要求するようになる。1歳8か月19日には、風呂に入りたくなりこのしぐさをしつつ風呂場の方に行き、大人を風呂に誘ったりしている。④手招きのしぐさ：1歳8か月18日、TVを見ている時、台所のMの所へやってきて“こっちにおいで、一緒に見よう”というようにMを見つめ手招きする。これが手招きの初出である。1歳8か月22日にも次のようなエピソードが観察されている。ダンボール箱の中に入れられているN、箱から出して欲しくなったのか、VTR カメラの側にいるTを見つめ手招きし始める。そこでTもまねしてNに手招きする。すると、Mの方を見つめMに手招きする。MがNの所へ行き、Nを箱から出してやる。NはすぐTの所へやって来る。

以上の身振りだけでなく、これまですでに出現していた“バイバイ”・“ごちそうさま”・“ちょうだい”のしぐさも、意味するものと意味されるものとが有縁でない高度に様式化した身振りに数えることも可能かも知れない。しかし、それらはすべて大人の手によって直接条件づけられた身振りである。この時期に見られた4つの身振りが特筆すべきなのは、それらが大人によって直接教え込まれたものでないことにある。特に、②や④の身振りは、Nがまずそのような他者の身振りを理解することから出発し、自身の力で信号の受手の立場から送り手の立場に到達している点で、注目に値する。“バイバイ”や“ごちそうさま”のしぐさを学習するには、子どもは単にあるコンテキストにおいてそのしぐさをするを大人の模倣を通じて学べばよい。すなわち、これらは、他者と同型的なしぐさをするによってただちに学習される可能性があると言える。これに対し、“側に来てくれと床をたたく”・“手招き”の身振りは、信号の送り手と受け手との役割が同型的と言うよりは相補的である。ある意味で、他者の立場と自己の立場とを入れ替えなければ、信号の受け手の役割から送り手の役割になることはできない。この時期に、このような自己と他者との役割変換が可能になってきたことは、同じこの時期にMとの追いかけてこの遊びにおいて初めてNがはっきり追いかけて役の立場を取れるようになっている（1;7, 24）ことから裏付けられる。

またこの時期には、日常生活の流れをより細かく理解し、それを先取りする形での身振り要求も見られている。たとえば、おなかですき早く食事をとりたくなると、ベビーチェアを置く床の上に自分から新聞紙を上げようとしたり、床をたたきここに早く新聞をしいてくれと要求したりしている（1;7, 17）。また、初めていわゆる“クレーン”と称されている身振りが観察されている。1歳7か月25日、Nは積木を実際に口に入れ食べるまねをし“アーシー”などと言う。そして正面にいるTに“マンマ”と言い口に入れていた積木を差し出す。Tが受け取らず、顔を近づけ、Nの差し出している積木を“ぱくぱく”と言い食べるまねをするや、Tの右手を引っ張りTの掌の上に積木を置く。直接手で持ち食べるまねをして欲しかったようである。このような身振りは、直接相手をコントロールしているという点ではいわゆる自閉的な子

どもたちのクレーン行動と同一であるが、それがやりとり場面でなされており、Nが相手の手を自己の問題解決のための単なる道具とみなしているわけではないという点において、重いコミュニケーション障害を持つ子どもたちに見られるクレーン行動とは質的に異なっていると言える。

§5. 自我の発達

「自己・自我」の発達について語ることは、子どもの対人関係・コミュニケーションについて語ることに他ならない。前者を質的に特徴づけることは後者を質的に特徴づけることである(麻生, 1985)。”このような考えに立てば、§1～4で述べてきたことと“自我発達”とは切っても切れない関係にある。従ってこの§5は、§1～4のデータに、そこでは触れなかったデータを加味した上で論じられ、本論全体の“まとめ”としての意味を兼ねたものであると言える。

(a) 第1期

前期(生後11か月・1歳0・1か月)すでに述べた“模倣(§3)”や“身振り・人への働きかけ(§4)”のデータから分かるように、この時期のNは自己の行為と他者の行為とを相互に関連づけ、行為の結果やさまざまなindexに導かれ、ごく限られた範囲ではあるが、自己と他者の行為の同型の対応性を意識した徴候を見せていた。他者に対する嫉妬的な行動もこの時期の初めから観察されている。MとFとが抱き合うとかならず割り込んでくるようになり(生後11か月0日以降)、またMが他児を抱いたり(0;11, 3)他児におもちゃを手渡したり(1;0, 30)他児の相手をしたり(1;0, 30)他児に食べさせたり(1;1, 7)するのを見るたびに泣いたり不満声を張り上げたりしている。Mが4か月年少のUとNとの2人に絵本を読んでやろうとすると、Uと一緒に読んで貰うのを嫌がり本をMに手渡したり(1;1, 7)、Uが甘えるようにMにしがみつくや2人の間に入り込み“ぼくのお母ちゃんだ”と主張するように大声を張り上げMの膝の上にあがったり(1;1, 10)している。これらの嫉妬行動を理解するのに、Wallon(1983)のように自我と他者との融即という複雑な概念を持ち出す必要はない。以下の3つの事柄によってそれらは理解できるように思われる。1. Mに対する特別な愛着(1歳1か月25日頃には、Nは離れた所にあるおもちゃをわざわざMの側に持って来て遊ぶようになっている)。2. Mと他児とのインタラクションのある側面がindexになり、NにMと自分とのインタラクションを想起させる(1歳1か月16日、§3で紹介したようにNは他児がその親に歩行を誉められているのを模倣しFに誉めて貰おうとしている)。3. Mが他児と関係を持つとNに対してMが働きかけたり応答してくれる蓋然性が大きく減少するという認識。

Nの他児(4か月年少のU)に対する認識は次のようなエピソードによっても理解できる。1歳1か月8日、NはUの触りかけている木刀をすばやく取り上げUの手の届かぬ所に持ち上

行為の共同化から対象の共同化へ

げたり、横倒しになっていた押し車を大人に起こして貰うや車を触っていたUの手を振り切るように車を遠くに押しで行ったり、同じおもちゃにUが触れ始めるとUの手を払いのけそれがうまくいかぬとUにそのおもちゃの一部であるブロックを差し出ししたりしている。1歳1か月10日には、手にしてかじっているおもちゃにUが手を伸ばすや、Uを見つめ威嚇するように怒った声で“アウヤ～アウヤウ”と発声している。Nにとって他児は自己の欲望を喚起すると同時に自己の欲望の成就を妨げる奇妙な存在であったかのようなのである。

他児にしる大人にしる、この時期のNにとって自己と他者とは対称的で同型的な関係というよりは、まだ非対称的で相補的な関係にあったと言える。Nが理解していたのは、自己の行為と他者の行為とがある種の因果的な連鎖関係にあり、自己の特定の行為が他者に見られることによって他者の特定の行為を引き出す蓋然性が高いという事実である。だが、Nの他者に対する働きかけは、まだ様式化・儀式化されず、直接的な道具の働きかけに留まっていた。この時期のNにとっての自己と他者との非対称関係の骨格は、次のように表現することもできる。他者（大人）は“見つめ・評価する”存在であり、自己（N）は“見つめられ・評価される”存在であると。このようなNの“見つめられ・評価される”意識は、§4で他者の賞賛や共感を求めるような行動として例示したエピソード（1;1, 10）・（1;1, 25）や、以下のエピソードによっても理解できる。Nは、カイグリカイグリの芸をしたので大人が拍手して誉めていると、その後すぐまたカイグリの芸をして自分から拍手したり（0;11, 30）、夜中に目を覚ましボーっとした状態でカイグリの芸をして自分から拍手したり（1;0, 5）、Gが“もうすぐバイバイだね”と言っていると手を振り始め、TとGとが立ち話をしている間に一人でカイグリをして自分から拍手し得意そうな表情でTを見つめたり（1;1, 10）している。Nは、自己の行為にしばしば随伴する他者の評価行動を、半ば自分の内側に取り込みつつあったと言えるかも知れない。また1歳1か月10日には、NとUとがおもちゃを取り合い争っているのでMがカメラを構えるや、Nは争いをやめ写真を写して貰おうとじっとカメラの方を注目し始めたりもしている。このように他者の評価行動を予期し半ばそれらを内に取り入れる徴候を見せ始めてはいるものの、まだこの時期のNは基本的には他者の“見つめ・評価する”行動を一方的に受け入れそれに受動的に反応するだけだったと言える。Nはまだ、後のようにわざと大げさに儀式的に反応することによって他者の行動を意図的にコントロールしようとするには至っていない。

後期（1歳2か月） 子どもはいつ頃から、何か課題をうまくなしとげた時一人ではよくそ笑むようになるのだろうか。Kagan (1982) は、2歳の誕生日前後に社会的な要因と言うよりもむしろ成熟の要因に規定された自我発達の質的転期があると主張し、その証拠の1つとしてこの時期に“うまくできた際の微笑”つまり“ほくそ笑み (smile of mastery)” が出現すると述べている。そして、このような微笑は社会的 smile ではなく私的な smile (private smile) であり、認知能力の成熟によるものとみなしている。しかし、上手にスプーンで食べる・上手

行為の共同化から対象の共同化へ

に積木を積む・上手に歩けるといったことが喜びに通じるのは、それらの行動が周囲の大人たちによって誉められ、そのことが子どもに喜びを与えるということを抜きにしては考えにくい。前述のカイグリカイグリのエピソードや、この時期の次のようなエピソードがそのことを示していると言えよう。Mの近くからベビーチェアの所まで歩いて行きそしてその椅子の上に立ち、嬉しそうにMを見つめる。Mが“立っちな”と声をかける。またMの所に戻って来るとMが椅子の方を指差し“もう一度立っちな”と言うと、ふたたび椅子の所まで行きその上に立ち、誉めるMの方を嬉しそうに見つめる（1;2, 12）。おそらく、子どもはこのように大人の評価行動を期待し、それを先取りし内化していくことによって、ある課題の達成に一人で喜びを感じるようになるものと考えられる。この時期はNが今まで以上に運動能力や事物の操作能力を身につけ始めた時期でもある。それに比例するかのようになり、大人の指示やモデリングに従って事物を操作することが増えてくる。大人に誉めて貰えることを期待し、大人の期待に沿って意図的に行為し、しかもその行為の結果期待し意図したことが成就したとすれば、このことはNに単なる喜びの感情だけではなく、自己の“力”の自覚・自己の“有能さ”の意識をもたらすに違いない。しかし、このことは同時に意図した行為が失敗した場合Nに自己の“無能さ”を意識させることにもなる。

この時期の最大のトピックは、Nがある課題を達成しようと意図し、それがうまくいかぬと怒りや苛立ちを表出するようになったことである。時には怒りを攻撃的に人に向けたりもするようになっている。たとえば、Tが2個の積木を重ね家の形を作ると、それを壊しすぐ同じものを作ろうとするがうまくできず甲高い苛立った声をあげる。MがNの意図を察し三角の屋根をのせてやるがそれを手で払い破壊しヒステリックに怒る（1;2, 10）。Mの指示で缶のふたをしめようとするがうまくいかず甲高いうなり声をあげ、苛立ったようにふたを放り出す（1;2, 10）。雨で外出できないと右手をバタバタ振り怒ったり、Mに噛みついたりする（1;2, 24）。特に、1歳2か月28日には“噛む”という行為が次のように高度に対人意識を伴う半ば儀式化した様式でなされている。NがしていることをやめさせようとMがNの手をつかみ押さえると、Mの手に口を近づけすぎさまかみつかず、最初にかむぞかむぞといった様子でMを脅そうとする。

この時期、Nはそれまでの一方的に“見つめられ・評価される”立場を一步脱し、それらの大人の評価行動を一部内化しそれと同時に事物の操作を介して自己と他者とを比較し始めることによって、自己の“有能さ”や“無能さ”を自ら感じ始めるようになったと言えよう。つまりNにとって、自己と他者とが部分的にしる同型的な位置を占めるようになったと言える。たとえば、1歳2か月28日、同い年の子がその母親に隠れんぼ的にイナイナイバーの遊びをして貰っているのを見、その子を押しのけ自分が相手をして貰おうとしたりしている。また、他者に対する攻撃行動が出現していることも、Nが自己を他者に対置させ自己を主張し始めたことを物語っていると言えよう。

(b) 第Ⅱ期

前期（1歳3か月） 1歳2か月に見られ始めた傾向が、この時期きわめて明瞭になる。つまり、Nは日常生活のコンテキストの中で自己と他者との同型性に気づき、それと同時に自己の力を自覚し自己を断固として主張し始める。まず前者については次のような事実から理解できる。§3で述べたように日常生活において他者の行動を模倣しようとするのが飛躍的に増えている。また、伝達的な指差しや名称語が出現していることも、単に“対象の共同化”の始まりを示しているだけではなく、Nがそのように“共同化される対象”を狭んで存在している自己と他者との同型性に気づき始めたことを示しているように思われる。後者の、自己の力の自覚や自己主張については、この時期にNが初めて指差しの力に気づき始めたかのようなことや§4で見たように新たな“人への働きかけ”が出現していることや、次のようにNが怒りっぽくなり思い通りにならぬとすぐ癇癪を起こすようになっていることから理解できる。たとえばNは、三輪車に乗ろうと近寄りかけたのに他児が先に乗ってしまうと、しゃがみこみ地面に顔を伏せて怒ったり（1;3, 12）、他児に先にブランコを取られ両手を上下に振って怒ったり（1;3, 13）、Mがすぐにバナナを与えなかったので怒り床にうつ伏せになってふてくされ、床に落ちていた菓子を食べ、離れた所からMがバナナを差し出すやわざわざMの所まで行きMの手のバナナを手でたたき落として怒ったり（1;3, 21）、テレビで自分の見ていた番組が終わりニュースになるや怒り、半分Mにやつあたりしたり（1;3, 21）している。

このように自他の同型性に気づき、自己を主張し始めるのと平行するように、他者の態度を今まで以上に内化し始めた徴候もうかがえるようになっている。このことは、積木を2個積み重ねたり、ペンのキャップをうまくはめ自分から拍手し嬉しそうに人の方を見たりすることが数多く観察されていることや、§4で紹介した他児を配慮した giving のエピソードや、次のような他者を区別し使い分けたような反応から理解できる。Nは、2～3歳年長の子どもがボールを持っていてもまったく怒らないのに同年齢の子どもがボールを手にするや手を上下に振って怒ったり（1;3, 23）、Mに庭に出ることを禁止されるやMではなくGの膝に顔を埋めにいき泣いてむずかたり（1;3, 29）している。

後期（1歳4・5か月） この時期は、共感・叙事的な指差しが出現し、対象世界がはっきり“共同化”され始め、それと同時に身振りなどによる人への働きかけもいっそう力強くなっていった時期である。Nは、ノンバーバルな手段で自分の思いをかなり適切に他者に伝えられるようになり、そのように“共同化された世界”を間に狭むことによって“語る（表現する）”主体として基本的に他者と対称的で同型的な立場に立つようになったと言える。それは、この時期のNがビューファインダーをのぞくといった他者の対象に対する視覚的な係わり方を模倣するなど、じつにさまざまな他者のしぐさを模倣するようになり、そのような模倣を通じて他者の行為の主體的側面を理解しようとするかのようにになっていることから裏付けられる。しかし、コミュニケーション・認識といった構造レベルに於ける自己と他者との同型性の意識

行為の共同化から対象の共同化へ

は、かならずしも現実の力関係に於ける自己と他者との対等性の意識を意味しているわけではない。むしろ、他者をより理解し、他者のさまざまな行動・態度を内化し始めることは、かたくなに自己を主張することよりは相手や状況に応じて自己の態度を使い分けることに通じていると言える。事実、この時期Nは状況によって人を使い分け、泣くにしても非常に演技的に人の様子をうかがいつつ泣くようになっている。たとえば、Tが禁止してもむずからずMが禁止すると甘えてむずかったり（1；4，0）、椅子に座るように叱ると椅子に腰かけテーブルに顔を伏せ激しく泣きつつときどき親の顔をうかがい、Fが誉めるやいっそう大きな声で泣き、Mが叱ると言いわけするように jargon でMに語りかけたり（1；4，4）、Mが叱るとFに訴えに行きFが叱るとMに訴えに行ったり（1；5，2）、VTR のコードを口に入れるのでMが叱るとTの方を泣き顔で見つめTの方に来ようとしたものの、Tも叱るや、Tの方に来るのをやめソファのシートに顔を伏せ悲しむふりをしたり（1；5，16）、叱られて両手で目を覆い顔を床に伏せ悲しむふりをしたり（1；5，16）している。また1歳3か月の時と同様、年長児と年少児に対する態度の相違も観察されている。3歳の子どもの三輪車を貸して貰い乗っていたが、その子が近づいてくるやすぐ三輪車から降りる（1；4，5）。ところが、自分より4か月年少の友達には、もっと攻撃的な態度を取っている。自分が触っている大人の自転車をその子が触ると、手でたたき自分一人で独占しようとする（1；4，10）。Nの玩具でその子が楽しそうに遊び出すたびにわざわざ近寄り玩具を取りあげに行く（1；5，10）。

他者の評価行動（誉める）がより深く内化されるようになり、かならずしも他者が実際に誉めなくても自分で誉めることによって満足し、そのような内的な目標に向かって努力するようになっていく。このようなプロセスは次の一連のエピソードからも理解できる。床にネジを3本立てては嬉しそうに拍手しMを見つめる。1本倒れると怒りすべてを払い倒してしまうもののまたアタックし、うまくできるとMを見つめ嬉しそうに拍手する（1；4，15）。机の上に積木を立て、Mを見つめ拍手し誉めてくれと催促する（1；4，19）。コップでうまく水を飲み、コップを置いて一人で拍手しふたたびコップで飲み少しでもこぼすとコップの水をすべてこぼしてしまう（1；5，18）。石を投げ水たまりにうまく入ると嬉しそうに一人で拍手し、失敗すると再度一人でアタックする（1；5，22）。

(c) 第Ⅲ期

前期（1歳6か月） Nは、大人の背後に自分のまだまだ知らない広い世界があることをしだいに感じ始めたかのようである。Nは、モノを指差しその名を尋ね、大人の発声と指差しを模倣したり、大人のモデリングを模倣し簡単なままごと遊びをしたりするようになる。また、延滞模倣も見られるようになる。このように大人の行動がモデルとして意味を持つようになることは、Nが単に他者（大人）の世界に対する関係を自己の世界に対する関係として引き写せるようになったことだけでなく、モデルとなる他者（大人）が自分より優位にあり有能であることをはっきり理解し始めたことを示していると考えられる。この時期に、Nは自己とさま

行為の共同化から対象の共同化へ

ざまな他者との関係にある種の順位構造として把握するようになったと言えるかも知れない。Nにとって重要なことは、より有能になることであり、それゆえ、モデルになり得るのは自己より優位で有能な他者の行動である。たとえば、公園で出会った小学生の男の子の後ろを嬉しそうに追いかけて、その子が少し相手をしてくれ始めるやその子のすること（砂場の縁に座ったりすべり台をすべったり）を次から次へと嬉しそうに模倣している（1;6, 15）。これに対して、4か月年少のUがNの模倣をして道具を操ったりするのもかかわらず、NはまったくUのまねをせず（1;6, 7） それどころかUをライバル扱いするようにUのつかんでいる物を奪おうとしたり、Uの顔をはいたり怒ってUを押しつけようとしている（1;6, 9）・（1;6, 28）。また9か月年少のSには、Uに対すると同様に玩具を取り上げたりするもの、もっと余裕のある態度で接し、Sに自分の力や有能さを誇示するように床に手をつき股のぞきのスタイルでクルクル回転してみせたりしている（1;6, 18）。

Nの有能になろうとする意欲は、モデルの模倣だけでなく次のような行動にも見られる。Nは長靴を引っ張り出してきて和机の上に手をつき自分で長靴をはこうとする。長靴が倒れると怒り、Mが手伝おうとすると怒る（1;6, 20）。食事の時自分一人で食べようとし、MがNの身体やNのコップなどに手を触れるとすぐ怒り食事を拒否する（1;6, 28）。このように、Nは大人の介助を拒否し自分一人の力でやろうとするようになる。また、自分の意図が通じないと怒ることもはっきりしてくる。Gにコップを取り上げられ、テーブル上のコップに手を伸ばしMを見つめむずかり声で訴え、Mがそのコップをすぐ取ってやらぬとテーブルの上を手でパンとたたき怒ったり（1;6, 15）、Mがあまり相手してくれぬとモノを手にしてモノでMをたたいたり（1;6, 21）、Mの手を引き台所へ連れて行くのでMが飲み物が欲しいのだろうとコップを手にするのとニコリしたのに、自分の欲しかった麦茶ではなくミルクをつがれるや突然ギャーギャーと激しく泣きわめき、後は何を与えても泣き止まなかったり（1;6, 29）している。しかし、以上のように自分一人の力でやろうと意欲し自分の意図を貫徹しようとする事が顕著になってきたとは言え、Nは自己を省りみずいたずらに自己を主張しようとしていたわけではない。自分の思惑通りに事物を操作できない時でも以前のように苛立ちすべてをおち壊してしまうのではなく、自分の路線の方を修正してそれに対処しようとするようになっている。たとえば、Nはパズル box のふたの穴に積木を入れようとしてうまく入れぬと、箱のふたを手であけ直接箱の中に積木を入れる（1;6, 20）。ままごとのヤカンでそそぐまねをする度に傾いてふたがコップの中に落ちるとこの事態に以前のようにヒステリックに怒ったりせず、何度目かからヤカンを傾ける前にふたを前もってはせずようになる（1;7, 0）。

Nは1歳2か月頃から大人に“見つめられ、評価される”一方的な立場から徐々に自己を主張し始め、1歳4・5か月頃には基本的に他者と対称的で同型的な立場に立てるようになった。そしてこの時期には、他者の模倣をするという獲得したスキルを用いて自己の体験世界を拡大しようとするに至っている。かくして、Nは次のような一つの矛盾を内にかかえることに

なる。それは、大人の力を借りずいろいろなことを自分一人のできるようになるためには、それだけいっそう自分より有能な大人をモデルにしなければならないという矛盾である。自律はうまく依存することによってのみなしとげられるのである。これは幼児期をその後も長く支配する矛盾とも言えるかも知れない。この時期のNは、この矛盾に対して自己主張と依存とのアマルガムとも言える一つの新しい態度を出現させている。それは、単に“見つめられ・評価される”という受身的な態度ではなく、他者に“見せる”・“誉めさせる”という受身的でありしかも能動的な態度である。Nは日頃は浴衣を着せられるのをすごく嫌がっていたのに、1歳6か月9日、浴衣を着せられたNを6人の大人が交互に誉めると、その後有頂点になり座卓の上にあがり踊るようにして自分の姿を長い間ファッションショーのモデルのように誇示し続けたりしている。またこの同じ時期、Nは大人に積極的に相手されるよりはむしろ大人に自分の行為を見守って貰い、主役である自分の行為に観客である大人が応じることを好むようになっている。

このように人に見られていることを快と感じるようになることは、Nが“見られている自己”を自分で意識し始めるようになりつつあったことを示しているとも考えられる。“見られている自己”を意識することは、単に“見られている”という意識と同じではない。前者は、“見る一見られる”ということをも自己と他者との関係のあり方の一つとして自分の内部に取り込んで初めて成立すると言える。すなわち、そこには“自己の対象化”が何らかの形で含まれているとも言える。鏡やVTRや写真に対するNの次のような行動からも、この時期にNが自己を徐々に対象化しつつあったことが示唆される。1歳6か月0日、ふとんたたきをテニスのラケットのように振り回しているN、自分の後ろ姿がテレビに映っている（撮映中のVTR）のを見てこれに注目し、“アリャー”と発声して自分の映像を指差す。その後も何度か自己像を見てこのように発声し、そして膝を少し屈曲しかけピョンと跳ねるようなしぐさを3回繰り返す。自分の動きに随伴してテレビの自己像の動くのに興味をひかれたよう。1歳6か月3日、生後9か月の女兒のいる家を訪問する。Nは自分のアルバムはすごく見たがるのにこの女兒のアルバムにはまったく関心を示さない。1歳6か月9日、姿見のすぐ前に立ち自分の顔を見ては嬉しそうな表情で、背後の離れた所にいるMの方を振り向く。これをまた繰り返す。Nは鏡の中の自己像を見るのが気に入っているよう。

後期（1歳7・8か月） この時期の最大のトピックは、Nが自己を対象化してとらえられるようになったことである。1歳7か月11日頃から、大人が“〇〇どれ？”と尋ねると、それに応答して対象を指差せるようになり、1歳7か月23日、“Nちゃんは何れ？”・“お母さんは？”・“お父さんは？”と尋ねられて初めて正しく自己・母・父を指差している。1歳7か月25日には、Mに“Nちゃんどれ？”と尋ねられ自分の左手の甲を右人差し指で押さえている。またこの日、Mに“お耳は？”・“お手々・あんよ・頭・お目々は？”と尋ねられ、正しく自分の身体各部を指差してもいる。しかしまだこの時点では、“お母さんのお耳は？”など

行為の共同化から対象の共同化へ

他者の身体部位に対する問には答えられずにいる。1歳8か月8日、Mが“Nのお鼻はどれ？”・“お母さんのお耳は？”と尋ねると正しく指差している。そして1歳8か月22日、壁面の親族の写真を指差し“へー”と発声しすぐ自分の顔（実物）を指差し、また写真の方を“へー”と指差し、それに座位から立位になりふたたび写真の方を“えーえっ”と指差し写真を取ってくれと要求している。Tがこの写真を壁面からはずしてNに見せ“N君どれ？・おじさんどれ？・N君のお父さんどれ？”などと尋ねると、正しく対応する写真の人物を指差している。この最後のエピソードはNが指差しによって自分の写真と自分自身とを同定したとも考えられる。

“自己の対象化”は、決して以上のような事柄で言いつくされてしまうものではない。それは長く続く一連のプロセスである。この時期のNは、まだ自己の所有物をはっきり理解していたわけでも、自分の名を言えたわけでも、鏡の自己像をはっきり自己と認知し得ていたわけでもない。しかしながら、たとえ一歩にしるNがそのようなプロセスに足を踏み入れ始めていたこともまた事実である。上述のエピソードだけではなく、この時期観察されたさまざまなエピソードがそのことを示唆している。自己を対象化することは、ある意味で他者の立場（態度）を取り、その立場から自分を見つめることに他ならない。この時期、Nがそのように他者の立場（役割）を取れるようになってきたことは、Nがぬいぐるみを擬人的に操れるようになってきていること（§3参照）や、自己と他者との相補的な役割関係を交換できるようになっていること（§4参照）からも理解できる。また、Nが自分の内側に取り込んだ他者の視点から自己を“見られる自己”として意識し始めていることは、次のようなエピソードから分かる。アップリカの押し車の背から取れたコの字型の背もたれの押し棒を首にうまく引っかけさも得意そうに、VTRのカメラの前にいるTの方を見つめ、アッハッハッと声立てて笑う（1;7, 25）。レストランのテーブルの上に肘をつき横の大きな鏡に映る自分の顔に見とれる（1;8, 5）。日頃大人が禁止していることをNがやりかけている時に、大人が近寄ると急にビクッとしたり引っぱり出しているものを片付けようとしたり、置物を元の位置に戻そうとする（1;7, 27）。公園に放置してあった他児の玩具を触っている時、見知らぬ3歳児が側を通ると叱られるのではと危惧したかのようにビクッと急いで玩具から離れる（1;8, 17）。公園に放置してある他児の玩具が触りたくなると、Mの手を引き一緒に触りに行かせようとする（1;8, 12）。後半3つのエピソードは、Nが他者の態度を半ば内化し“超自我”を形成しつつあることを示していると言ってよいかも知れない。そこには、他者の未来の行動を先取りしそれに対処しようとする徴候が認められるように思われる。

以上のように他者の態度を内化し“内なる他者”の視点を持つようになりつつあることは、N自身の内部から湧き出る自己主張の要求と複雑にからまり合い、今までには見られなかった微妙な対人的かけ引きを生み出すことになる。いくつかの例を示す。ままごとを片付けられ不機嫌になっているN、Mが気分を変えてやろうとボーリングのピン3本を床に立て、ボールを

転がし3本のピンを倒すや怒り出す。そこでMがふたたびピン3本を立ててやり、Nにボールを手渡す。Nがボールを転がし1本のピンが倒れるのでMが誉め拍手するや“アーアー”と発声し床を手でたたきすねたように怒る。Mがピンにロックアスタックの輪をはめてNの気を引こうとするが、Nはすぐさまボーリングのピンの入っていた箱に自分からピンを片付け始める。完全にすねているよう(1;7, 11)。FがNと一緒に入浴した際、むりやり肩を湯舟につけさせたため泣き出す。風呂あがりてMに抱かれているN、後からあがってきたFが“握手”と言い仲直りしようとするが、差し出されたFの手をはたき握手を拒否する(1;7, 24)。Fと入浴、昨日と同様肩までつからされ、ムツとした表情をしている。しかし、風呂からあがって後、しきりにまだ浴室にいるFの方を気にしている。Fが風呂から出てくるや、Fにごまをするかのように“アタータン”と発声しFに駆け寄り(1;2, 25)。床に落ちていたものを拾い口に入れGに叱られる。しかし以前のように泣いたり泣きまねをしたりせずに、むっとした表情ですねた様子をするだけ(1;7, 27)。Nがものを口に入れたのでMが取りあげ隠してしまう。Nはすぐむずかたりはせず、少しして“アーウー”と文句を言うように発声する。そこでMがNに言い聞かせるとNこれをじっと聞く。Mがしゃべり終わるや“エーエー”と怒り仰向けの姿勢で足をバタンバタンとばたつかせ始める(1;8, 22)。もはやNを、“誉めると喜び・叱ると泣いたり怒ったりする”といった単純な図式でとらえることは困難になる。Nがどのように反応するかは、その状況における自分の“つもり”と相手の“つもり”とのかけ引き的なやりとりに規定されるようになったと言える。

またこの時期には、他児との関係にもいくつかの新しい展開が観察されている。4か月年少の友達とふすまの回りでイナイナイバーと追いかけごっこをミックスしたような遊びをしたり(1;7, 8)、別の4か月年少の子どもの家に行った際、その子を年少と思ったのかその子を抱こうとしたり玩具を次々と差し出してさかんに世話を焼いたり(1;7, 29)、2か月年長の友達と向かい合った状態で4~5回立ったりしゃがんだり相互模倣的なやりとりを嬉しそうにしたり、2往復ほど give and take のもののやりとりをしたりしている(1;8, 11)。また1歳8か月9日には、家に遊びに来たほぼ同年齢の他児がNの玩具を触るたびにそれを取りあげに行き、自分の玩具に“所有心”のあるがごとき徴候を示したりもしている。以上の事柄は、Nにとって自分よりはるかに力のある大人ではなく、むしろ対等な力の同年齢の子どもたちこそが自己と対等な他者、つまり等身大の自己を映し出す鏡の中の自己とも言える他者としてNの前に姿を現わしてき始めたことを物語っているように思われる。

IV おわりに

§1. コミュニケーションの発達と対象世界の共同化

本児の生後11か月から1歳8か月までの“指差し”・“言葉”・“模倣・象徴遊び”・“身振

行為の共同化から対象の共同化へ

表 2 指差し・言語・模倣・身振りの発達のみとめ

	指 差 し	言 葉	模倣・象徴的遊び	身振り・人への働きかけ
11 か 月	偶発的指差し, 周囲の者は認知せず, 指でなぞる・つつくあり。	食物に関する“マンマンマン”と言った発声はあるが, 意味に揺れ, いくつかの原言語風の発声あり。	全体として模倣多くなく, しかもそれらは, ゲーム的やりとり状況で大人に強化されたものか, あるいは結果の模倣。	言語指示ある程度理解。様式化した身振りまだない。
1 歳 0 か 月	行きたい方へ手差し, しかし意図のはっきりせぬ手差しも多い。			giving が出現, 要求にも用いることができるようになる。自分のしたことに他者の賞賛を求めるような様子あり。
1 歳 2 か 月	本やシートなどの絵を定位的に指差し発声するようになる。	言葉的に聞こえる原言語いくつかあり。物や人の名を含む言語指示理解の徴候。	少し複雑な物の操作の模倣が出現。他者と同じようにしようとする意図見られるようになる。	giving に必ずジャルゴンが伴うようになる。他者への挨拶としての giving が出現する。
1 歳 3 か 月	指差しがきわめて多くなる。ただし要求の指差しはあるものの多くは定位的。	初めて名称語が出現する。要求や叙述の発声もあり。	模倣がさかんに, 模倣によって有能な自己になろうと意欲しているかのよう。	他者の手を引き要求するように, また自発的なバイバイや他者の好みを配慮した giving も見られる。言葉やコンテキストの理解を示す。
4 か 月	要求の指差しが多様に, 共感叙述的な指差しも出現。	ジャルゴンきわめて多い。語彙約5語(名称語3), 間に答え名を言う。	大人の日常行動など数多く模倣。模倣を通じて, 他者の行為の主體的側面を理解しようとするかのよう。	拒否の首振り, ちょうだい・ごそうさまのしぐさ, showing が出現, 様々なコンテキストで人の手を引いたり, 人を見つめ発声し移動し要求すること多くなる。
1 歳 5 か 月	共感叙述的な指差し多くなり, 様々な対象が共同化。2種の身振りの結合あり。			
1 歳 6 か 月	指差しが発語と結びつくようになる。色々な対象を指差し, その名を尋ねるようになる。	語彙数約15~20語(名称語10)。物に名あることを知る。	延滞模倣が出現。ママゴトなどの大人の見たて遊びを同化し模倣できるようになる。	“おじさんに見せといで”などの言語理解, givingやバイバイが自発的ゲームの中で使いこなされるようになる。
1 歳 7 か 月	応答の指差しや非難の指差しが出現。発語・指差し・身振りが複合的に使用される。	語彙あまり変化せず, 物の名の理解は増加。有意味語的ジャルゴン多いが, 同定しがたい, 人称語まだはっきりせず。	延滞模倣数多く見られ, ママゴトにも構造的流れ, また大人の指示や大人の模倣によってヌイグルミを擬人的に操れるように, イメージの世界が開花し始める。	拒否の首振りが応答としてよく用いられ, 意味するものと意味されるものとが有縁ではない身振り, 手を開閉水遊びを要求するしぐさ・手招き・側にきてと床をたたく身振りなどが出現する。身振りを相補的役割の交替によって大人から学習する。
1 歳 8 か 月	名言えずとも理解を示す指差し多い。自分と自分の写真とを指差しで同定する。			

り・人への働きかけ”の発達をまとめて表2に示す。表を見て分かるように, Nの1歳3か月頃と1歳6か月頃に発達の質的な転回点が存在している。1歳3か月, Nは指差しを数多くし始め, 指差しを要求にも用いるようになり, 初めて名称語を獲得し, 模倣行動が急に多くなり, 他者の手を引くなど“人への働きかけ”にも目ざましい進展が見られるようになっていく。この時期あたりから, showing が出現し空を飛ぶ飛行機や鳥をNが共感叙述的に指差すようになった1歳5か月頃にかけてを, “対象世界の共同化”が始まった時期として位置づけ

行為の共同化から対象の共同化へ

られるように思われる。本論の大きな主張点の1つは、Trevarthen & Hubley (1978) の言う“第2次間主観性の成立”や山田 (1978) の言う“三項関係”がもし筆者の言う“対象世界の共同化”と同一意味内容であるとするれば(※理論的背景が異なるため、厳密に言うると一致しているとは言い難い)、それに先立って“行為の共同化”という、モノと人とをある意味で複合化した認識レベルが存在しているということであり、もしTrevarthenや山田たちの差し示すものが筆者の“行為の共同化”と同一意味内容であるならば、そのようなレベルとは質的に異なる“対象世界の共同化”という認識レベルが存在しているということである。

“対象の共同化”は、showing・伝達の指差し(手差し)・名称語のいずれかがはっきり獲得されて初めて明示的に示されるといえる。Nの場合、1歳1か月の時尻で踏みつけたゴムネコの人形を大人の方に差し出すという showing らしき行動が観察されたものの showing か giving かははっきりせず、はっきりした showing が確認されたのは1歳5か月である。これに対し、伝達の指差しと名称語は、ほぼ同じ時期1歳3か月に獲得されている。名称としての語は常に大人の指差しを通じて子どもに教えられることを考えるならば、指差しの獲得と名称語の獲得とはそもそも内的に関連しあったものであり、獲得時期の一致はむしろ自然なことのようと思われる。本論の最初に述べたチンパンジーのルーシーの場合と同様に、Nの場合も“対象世界の共同化”に足を踏み入れるに際して、人間の共同体によって生み出された“指差し”や“言葉”というシンボル体に大きな恩恵を被っていると見える。1歳3か月にNがそのようなシンボル体を獲得するようになる兆しは、それに先立つ数か月のNの行動に認められる。第1に、Nは1歳0か月頃から絵本を読んで欲しくなると本を大人に差し出すなど道具的とは言えかなり様式化した行動スタイルと言える giving によって、かなり自分の要求を適切に伝えられるようになっていく(このような giving は、大人が本を手にして読むというイデアルな状態に物理的に近付ける手法と考えられるため、“対象の共同化”とはまだ見なすことはできない)。第2に、1歳2か月頃上がり目下がり目の絵を見て自分の目尻を人差指で押さえようとしたり、絵本などの絵を大人のまねをして人差指で押さえるなど、人差指でものを押さえる行動を模倣的に獲得するようになっていく。以上の2点を考えるならば、模倣的行動がきわめて拡大する1歳3か月に、Nが“指差し”・“名称語”といったシンボル体を大人から獲得できるようになっていることも納得できるように思われる。また、生後1歳4・5か月における指差し行動の発達も、その時期の模倣行動の発達ときわめて連関しているように思われる。他者の“しぐさ”・“行為”を模倣することは、それらの“しぐさ”や“行為”をある意味で共同化し自己を他者に重ね合わせていくことである。このような自己と他者との関係が“対象世界の共同化”とどのようにからみあっているのかは今後の重要な研究テーマであると言えよう。

2つめの質的転回点は1歳6か月頃にある。興味深いのは、Nが物には名前があることを理解したかのように物を指差し名を尋ねるようになった時期に、延滞模倣が出現していることである。延滞模倣は Piaget (1945) の象徴能力の理論にのっとってしばしば言語発達と関連させ

て言及されているものの、Ryan (1974) の指摘するように両者の関係は Piaget においてもきわめて曖昧である。本事例で見られた、物には名前があるという理解と延滞模倣との関連性がどこまで普遍的に言えるのか今後事例研究を積み重ねていく必要がある。物に名前があると感じることは、子どもの前に世界が記号化されるべきものとして姿を現わしてくることである。すなわち、知覚世界が単に他者にもまた知覚し得る“間主観的な世界”としてではなく、“共同化された“記号”＝“意味するもの”によって差し示される“意味されるもの”の世界として登場し始めることに他ならない。これと似た構造が延滞模倣の中にも存在している。たとえば、3日前にMが実家の玄関のドアをロックしたのを模倣して、実家のドアをロックしたエピソード(1;6, 18)を考えて見よう。このような延滞模倣は、知覚しているドアに“ドアをロックする”という他者から学んだ“しぐさ”記号(意味するもの)を適用することによって、知覚しているドアを新たに“意味されるもの”すなわち“ロックされるべきドア”として意味的に“共同化”することに他ならない。延滞模倣は、Piaget が考えたように過去の知覚事象(意味されるもの)を延滞模倣(意味するもの)によって再現前させるが故に、表象能力を予兆しているのではない。このように、個体の心的プロセスに“意味するもの”と“意味されるもの”という言語学の用語を用いるのは本来誤用であると言える。延滞模倣が“記号”に少しでも似ているのは、それが第一に他者の“しぐさ”を自己の身体に写したものであるという意味において他者と“共同化”されたものであり、第二にその“しぐさ”を行為することによって世界に新たな意味を出現させるからに他ならない。たとえば、Nは1歳8か月21日、実家の庭の石燈籠の前に行き正座して合掌している。Nは、このような“しぐさ”記号によって、石燈籠に1つの“意味”を与えたと言える。Nが1歳6か月頃からこのように“記号”的世界に足を踏み入れ始めたことは、1歳7・8か月頃になると“意味するもの”と“意味されるもの”とが有縁とは言えない身振りがいくつか獲得されていることから強く示唆される。

§2. 自我発達と対象世界の共同化

前述の§1と同様にここでも模倣行動が1つの大きな焦点になる。Mead (1934) は、言語の起源を考える際に Wund のように模倣に訴える理論を批判し、あくまでも社会的な交互作用によってそれを考えようとしている。Mead によれば、信号の送り手が信号の受け手の反応を限りなく自分の内側に繰り込んでいくことによって送り手が自己の信号に受け手の態度で反応する“有意味言語”のレベルのコミュニケーションが成立するのである。そしてこのことは、信号の送り手の態度が彼自身の内部となった信号の受け手の態度によって対象化され、自我(Self)が成立することも意味しているのである。Mead (1934) によれば、模倣が可能になるのもこのようにある個体が自分自身の行為を他者の態度で見ることができるようになっているからである。しかしながら、すでに述べてきたデータからも分かるように、Mead のようにかくも単純に“模倣”の問題を切り捨ててしまうわけにはいかない。Mead が念頭に置いていた

行為の共同化から対象の共同化へ

のはかたや古めかしい 模倣本能説であり、かつ大人の人間の模倣行動である。彼は乳幼児の模倣行動についてはまったく考えていない。言語の起源ではなく、乳幼児のコミュニケーションや自我の発達を問題にする限り、“模倣”をもっと正面からとらえていく必要がある。本章の§1で述べたことから分かるように、子どもが“指差し”や“言葉”を獲得していくプロセスを“模倣”をまったく抜きにして語ることは不可能なことと言えよう。“自我”の発達についてもしかりである。

表3 自我の発達のまとめ

自 我 の 発 達	
11か月～1歳1か月	自己の行為と他者の行為との連関性は理解されているが、Nにおける自己と他者とは非対称的で相補的な関係に留まっている。大人は“見つめ・評価する”存在であり、Nは“見つめられ・評価される”存在と言える。
1歳2か月	思い通りに行かぬと苟立ち怒るようになる。大人の評価行動の一部を内化し、また事物の操作を通じて自己と他者とを比較し始めることによって、自己の“有能さ”や“無能さ”を感じ始める。
1歳3か月	自己と他者との同型性に気づき、自己の力を自覚し始める。思い通りにならぬと癩癩、自己主張の始まりと言える。
1歳4・5か月	“表現する”主体として基本的に他者と対称的で同型的な位置に立てるようになる。その反面自他の現実の優劣を意識し、人によって態度を使い分けたり演技的に振舞うことが顕著になる。自己の目標に向かって努力できるようになる(他者の評価を内在化)。
1歳6か月	自分よりはるかに有能な大人の行動がNにとって有能な自己になるためのモデルとしての価値を帯びるようになる。このようなモデルへの依存が自分一人でやりたいという自律への欲求とぶつかり、大人に“見せる・誉めさせる”という新たな態度を出現させる。
1歳7・8か月	名を言われ自分を指差すなど“自己を対象化”できるようになる。自他の相補的な役割の変化や、他者の態度を半ば内化した“超自我”らしきものも見られるようになる。また、同輩の子どもが自己の鏡像的な他者になる。

“自我”の発達のまとめを表3に示す。Nは1歳2か月頃から自己と他者との事物操作の結果を比較することによって自他を比較し始め、1歳4・5か月頃には、ほぼ自己と他者とが同型的存在であることを認識するに至ったと言える。しかも、このような時期は“対象世界の共同化”が始まった時期とほぼ一致している。そもそも“対象の共同化”とは、自己が注意を向けている対象に他者もまた注意を向け得るという、自己と他者との同型性をある程度前提にした認識に基づいていることを考えれば、上のような一致はむしろ当然のことかも知れない。このように、子どもが“自己と他者との同型性”を認識していくプロセスは、子どものコミュニケーションや対象世界の認識と深く結びついていると言える。そして子どもにおける“自-他の同型性”の認識は、子どもの模倣行動によって初めて目に見える形で我々に示されるのである。たしかに、Mead流に自我の発達をとらえられる側面がまったくないわけではない。たとえば、Nが最初芸をしては自動的に拍手をしていた段階から他者の拍手を促すように拍手する

行為の共同化から対象の共同化へ

段階を経てうまく石を水たまりに放り入れては自分で拍手したりするようになっていたり、叱られるときわめて演技的に泣いたり、“超自我”らしきものを持つようになっていたりなどは、他者の態度を自分の内側に取り込むようになったことを示していると言える。しかし、これらのことを Mead のように模倣を抜きにして単にやりとりの社会的相互交流によってのみ説明するわけにはいかない。第Ⅲ章 § 5 で述べたことから分かるように、自我の発達には模倣の発達と実に深くからみあっているのである。もっとも興味深いことは、単に“見つめられ・評価される”だけの存在であったNが、模倣行動によって示される自他の同型性の認識の発達と呼応するかのように自己を主張し始めていることである。他者と同じように自分もやりたいという欲望、このような欲望が本論で扱った大部分の時期のNの自我発達を大きく規定していたと言える。最後に本論全体を簡単にまとめると次のようになる。第Ⅰ期：模倣はきわめて少なく、他者が圧倒的に優位でNの自己はそれに一方的に従属している。第Ⅱ期：模倣が非常に多くなる。Nの自己は他者と対等な位置に立とうと“我”を主張し始める。そして“対象世界の共同化”が始まる。第Ⅲ期：延滞模倣が出現する。Nは“記号の世界”に足を踏み入れ始め、自己を自分の内側に取り込んだ他者の立場から対象化するようになる。

従来の研究では、言語や指差しなどの発達は常に単独のテーマとして扱われ、模倣・身振り・自我などの発達ともからめ総合的に論じられることはほとんどまったくなかったように思われる。本論で指摘した事柄が、一事例のエピソードを越えてどこまで普遍化し得るのか、今後そのような総合的研究が数多く現われることを期待したい。

引用文献

- 麻生武 1981 乳児Nの“人”としての成長——生後0か月から6か月まで—— 大阪市立大学大学院文学研究科「人文論叢」, 10, 17-38.
- 麻生武 1982 行為の共同化に向けて——1年目後半Nの“人”としての成長—— 大阪市立大学大学院文学研究科「人文論叢」, 11, 1-30.
- 麻生武 1985 自己意識の成長 「児童心理学の進歩」, Vo 124, 163-187, 金子書房.
- 麻生武 1986 生後6か月間の欲望の発達——乳児の要求行動の分析—— 京都国際社会福祉センター紀要「発達療育研究」, Vol. 2, 29-78.
- 麻生武・木村真佐子 1985 T君らしき世界——ある就学前自閉症児のごっこ遊び・言語・自我・象徴能力の分析—— 京都国際社会福祉センター紀要「発達療育研究」, Vol. 1, 25-79.
- Goodall, j. 1971 *In the shadow of man*. William Collins Sons. (河合雅雄訳 1973 森の隣人 平凡社)
- Guillaume, P. (Original 1st pub. 1926, Trans. 1971, Halperin, E. P.) *Imitation in children*. The University of Chicago Press.
- 秦野悦子 1983 指さし行動の発達の意義 教育心理学研究, 31, 255-264.
- Hayes, C. 1951 *The ape in our house*. (林寿郎訳 1971 密林から来た養女 法政大学出版局).
- Kagan, j. 1982 The emergence of self. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 23, 363-381.
- Kellogg, W. N. 1968 Communication and language in the home-raised chimpanzee. *Science*, 162, 423-427.

行為の共同化から対象の共同化へ

- Linden, E. 1974 *Apes, men, and language*. Penguin Books.
- Mead, G. H. 1934 *Mind, self & Society*. The University of Chicago Press. (稲葉他訳 1973 精神・自我・社会 青木書店)
- Menzel, E. W. & Halperin, S. 1975 Purposive behavior as a basis for objective communication between chimpanzees. *Science*, 189, 652-654.
- 小椋たみ子 1985 初期言語発達に関する研究——原言語から言語へ—— 島根大学教育学部紀要, 19, 25-49.
- Piaget, j. 1945 *La formation du symbole chez l'enfant*. Delachaux et Niestlé.
- Ryan, j. 1974 Early language development: towards a communicational analysis. In M. P. M. Richards (Ed). *The integration of a child into a social world*. Cambridge University Press, pp. 185-213.
- 築島謙三 1967 ことばの本性——その心理学的考察—— 法政大学出版局.
- Trevarthen, C., & Hubley, P. 1978 Secondary intersubjectivity: confidence, confiding and acts of meaning in the first year. In A. Lock (Ed.) *Action, Gesture and Symbol*. Academic Press, Pp. 183-229.
- 山田洋子 1978 言語発生を準備する一条件としての三項関係の成立(1)——指さし, showing, giving などの出現経過—— 日本心理学会42回発表論文集, 840-841.
- 山田洋子 1982 初期の発話意味の発達(1)——食物と乗物を表わす名詞の使われ方—— 愛知淑徳短期大学研究紀要, 21, 93-106.
- 山田洋子・中西由里 1983 乳児の指さしの発達 児童青年精神医学とその近接領域, 24, 239-259.
- Wallon, H. (浜田寿美男訳編 1983 「身体・自我・社会」 ミネルヴァ書房)
- Wittgenstein, L. 1953 *Philosophische Untersuchungen*. Basil Blackwell. (藤本隆志訳 1976 哲学探求 大修館書房)